

浜松中納言物語を読む(前編)

— 散逸首巻・巻一・巻二・巻三 —

島内景二

1 はじめに

浜松中納言物語は、後期物語中の最大の傑作である。源氏物語の圧倒的影響を受けて成立した作品のだが、独自の世界観を形成することにも成功しており、場合によっては源氏物語よりも始原的形姿を残存させているとの見方も許されるであろう。

本稿は、浜松中納言物語の構造を逐一分析することを心がける。全体像を把握するためには、部分部分に内在するベクトルを正しく測定せねばならないと考えるからである。「浜松中納言物語を読む」というタイトルの意味は、「浜松中納言物語の話を読む」「浜松中納言物語の表現と主題の間を読む」「浜松中納言物語を通して日本文学史を読む」ということなのである。

以下、本文や頁数などは日本古典文学大系本に依ることとし、単に「大系」「大系本」などと略称する。

2 散逸首巻を読む

浜松中納言物語の首巻は失われている。存在しない巻を読むことはできないのだろうか。私達に可能なのは、現存する巻一から巻五までを読んで、そこから翻って散逸首巻に書かれてあったことを類推するという作業だけである。大系一四一〜一四五頁に、首巻の粗筋が大変詳しくまとめられている。源氏物語に「欠巻X」が存在したとする論が盛んだった時期がある。しかし、研究者達が「欠巻X」に求めたのは、既存の巻々から容易に推測できることばかりであった。そういう作業の蓄積は、作品を「読む」行為に

該当するのであろうか。

散逸首巻(広く散逸物語すべてを含めてもよい)の研究は、粗筋の復元をもって終わりとすべきではなく、復元した粗筋に内在する構造(話型)まで錘鉛を下ろすべきなのである。ここにおいて、私達は「表現」を読んでいるのではない。なぜなら、表現は失われているからだ。表現の存在しない作品も、「話型」を読むことはできる。表現の存在する巻も存在しない巻も、話型研究によってほぼ等しい分析がもたらされるであろう。そのことによって、散逸部分から現存部分が新しく照射されることもあるに違いない。現存部分(祖型)から復元された散逸部分(反復)が、現存部分(反復)を説明するモデル(祖型)へと昇格することも不可能ではない、ということだ。

2・1 父と母の出自 この物語の主人公は、浜松中納言と呼ばれる男性である。物語文学は、主人公の両親の紹介から始まる。中納言の父は皇族で、「式部卿宮」と呼ばれていた。式部卿宮の父は、当然天皇である。中納言は、天皇の孫ということになる。式部卿宮は、先帝の第三皇子だったのであろう。第一皇子が当帝、第二皇子が東宮であると推測できる。その式部卿宮の一人子が中納言であった。

三人の皇子の中で、まず式部卿宮が早逝する。第二皇子の東宮も、巻五(四〇四頁)で死去してしまう。大変に「命短き族」なのである。この運命は、主人公をも襲うであろう。中納言が生きて二十四、五、六歳の坂が越せるかは、甚だ心もとないのだ。

中納言は、父方から「命の短き」という遺産を受け継いでいる。それは一見マイナスの遺産のようではあるが、一刻も早く愛する人の住む世界に

行きたいと思う時には〈転生〉をもたらすプラスの遺産へと転換する。この世に存在する物は、すべて両義性を帯びているのである。

中納言の母の出自は、今一つよくわからない。彼女の父は、「大将の大殿」(二八八・三九六頁など)とされているが、他の箇所にも血筋に言及する表現が見えないのである。たぶん藤原氏なのであろう。

この物語では、主人公に関する限りでは、母子の絆ではなく父子の絆の方が重視されているのである。ちなみに、唐后の場合は母と強く一体化していることが知られる。〈父と男児〉・〈母と女兒〉というように、同性の親子同士の関係が重要なようである。

それにしても、物語の主人公を〈天皇・東宮以外の皇子の子供〉として登場させるのは、かなり面白い設定である。第三皇子本人は、長生すれば即位する可能性はわずかではあるが存在する。早逝した第三皇子の子は、決定的に王権から疎外されているのである。あるいは、平城天皇の皇子・阿保親王の第五子である在原業平、桐壺帝の皇子・光源氏の子とされている薫などに主人公を近づける工夫が、浜松中納言物語ではなされているかもしれない。しかし、業平にしても薫にしても母は内親王(皇女)であるわけで、「浜松」とは違っている。

中納言は、王権から微妙な位置にいる。境界線上にいるわけで、やがて唐に渡るに及んでも唐の王権と微妙に関わることもなっていく。中納言は自由に日本と唐の境界を越え、高貴な女性ともやすやすと境界を越える人物なのである。

2・2 父の死 中納言が十四、五歳に達しないうちに、父・式部卿は死去した。この時、式部卿宮は何らかの形見を残さなかったのであろうか。

日本文学には、父と子を結ぶ大きな話型があり、私はそれを〈高藤型〉の話型と仮称している。子供が幼い時に(母親の胎内に入っている未生の時の場合もある)、父親は遠くへ旅立ったり、死去したりする。去りゆく父親(死にゆく父親)は、子供の繁栄と幸福を願って形見の品物を残す。この形見の品物は〈如意宝〉であって、ありとあらゆる願いを所有者に叶えさせてくる至上の宝物である。さて、成長した子供は父親を求め、父との再

会を目ざして旅に出る。父親が生存していた場合は、形見の如意宝が手かりとなつて父子の対面が果たされるし、父親が死亡していた場合は夢の中で一瞬の再会が果たされたりする。詳しくは、拙稿『柏木物語の成立』(『国語と国文学』昭61・8)を参照していただきたい。

『浜松』という作品では、全体的に見て〈如意宝〉を物質として提示することは少ない。如意宝は人間の心理状態の象徴と解することができるのだが(高藤型の場合は、子供の成功と一族の繁栄を祈る親の真心の象徴である)、それが『浜松』で用いられることは少ないのである。だから、式部卿宮も死にゆく際に形見の如意宝を残していないのであろう、と推測される。『浜松』では、〈心〉に如意宝という〈形〉を与えて表現するという伝統的な文学手法があまり用いられない。〈心〉そのものが自立し、肥大化しているのである。後に、中納言の夢に死去したはずの式部卿宮が出現し、唐に転生したことを告げる。これは、夢の中で父子の対面が果たされる高藤型の話型を引きつづけているのだが(御伽草子の『小敦盛』などのパターン)、中納言はその夢を完全に信じて、再会すべく渡唐を決意するのである。如意宝の力で夢の中で再会するのではなく、夢の中で父から子へと如意宝が伝授されるのではない。〈夢〉自体が〈如意宝〉なのである。ちなみに、如意宝は所有者に、致富や不老長寿を可能にする至上の宝物である。『浜松』における素材としての如意宝の不在は、主人公の中納言が立身出世や致富、更には長生を願わないことの反映とも言えるであろう。現世での栄華を超越したものを、中納言は求めているのだ。

ちなみに、『浜松』にヒントを得たといわれる三島由紀夫の『豊饒の海』は、転生する主人公が前の人物と同一人物であることを証明するものとして、ホクロなるものを設定している。ホクロ自体が主人公に幸福をもたらすのではないが、ホクロによって主人公の精神の血脈が証しだてられる(本多は、ホクロによって貴種達と再会する)という点で、やはりホクロは如意宝の一形態なのだ。ホクロという〈形〉が、ホクロを持つ人々の〈心〉の一致を示すのである。やがて、第四作『天人五衰』において、ホクロという〈形〉が、〈心〉を含まないことが明らかになってゆく。『天人五衰』

の結末は、『浜松』とも微妙に関連する。『浜松』では、主人公はまだ生きていられるうちに物語が終了する。彼は、二十四、五、六歳を越せぬだろうと予言されている。私も、たぶんそういう運命だと思う。しかし、もし中納言が二十四、五歳を過ぎてても死ななかつたら(死ねなかつたら)どうなるだろうか。中納言は、真の(へ仏の変化)ではなかつた、ということになるのだ。彼の見てきた夢やお告げがすべて虚構だった、彼の存在自体が虚妄だった、ということになる。これは『天人五衰』の世界そのものだ。『浜松』はそうはならないだろうが(中納言の死は必然)、『天人五衰』(『豊饒の海』)は確かに『浜松』の世界を踏襲しているのである。

2・3 中納言と大姫の愛 中納言の母は、夫の式部卿の死後、左大将と再婚した。その左大将の連れ子である二人の姉妹のうちの姉(大姫)と、中納言は秘かに契りを結んだ。そして大姫は懐妊する。大姫の出産が近づいてきた時に、中納言は大姫に心を残しながらも父と再会すべく渡唐したのであった。

これは、高藤型の話型である。中納言と大姫のそもそものなれそめは、おそらく石山でなされたのであろう。二人は石山で一夜の契り(結)を結び、それによって子宝を授かる。二人の関係がたとえ複数回あったとしても、最初の交会で既に懐妊していたと解釈する方がよい。石山寺に籠もった夫婦の夢に神仏が現われ、何らかの如意宝が手渡される、やがて夫婦は貰った如意宝の人間化した貴種を子供として生むことになる、という(へ申し子)譚と重なるのである。しかし、『浜松』では、物質としての如意宝は登場しない。夢だけで十分なのである。又、この生まれてきた子供の栄華も、この物語の眼目となることはない。

そして、生まれる子供の子供の父である中納言は、まだ見ぬ我子を残して遠く異郷へ旅立ってゆく。高藤型の話型の典型的発露とも言うべきこの部分にも、形見の如意宝が登場しない。なくても構わない、というのが『浜松』の論理なのである。もし、中納言が帰国することもなく唐に居着いた場合、子は父を求めて旅に出ることであろう(中納言が父を求めて渡唐したように)。その時、何が(父子の絆)を証明するのだろうか。たぶん、夢

なのである。又しても、夢。夢だけですべてが信じられる人々なのである。なお、「2・2」の父の死と、「2・3」の大姫との契りが構造上対応することを、ここでもう一度注目しておきたい。どちらも、高藤型の話型に属するものであった。そして、もう少し詳しく見てみると、「父を求めて渡唐する中納言」という粗筋の中に、「子を残して遠くへ去ってゆく中納言」という要素が組み込まれていることが判明する。所謂(へ入れ子型)の構造なのだ。祖型と、祖型の反復とが、二つで一セットになっているのである。

2・4 中納言の渡唐 中納言は、朝廷から三年間の暇を賜わった。そして渡唐したのであった。三年後に、中納言は唐で儲けた子供を連れて帰国することになる(巻二)。

三年間の異郷滞在というのは、典型的な旅の話型である。浦島太郎、山幸彦、光源氏の須磨明石流離なども重なるであろう。浦島太郎は玉手箱、山幸彦はシオミツ玉とシオヒル玉、光源氏は夜光の玉に喩えられた明石の姫君を、それぞれ故郷へ持ち帰った。中納言は、(子供)を連れ帰ったのである。

2・5 転生をめぐっての見通し 『浜松』は、(転生)を重要なモチーフとして成立している。この転生について、とりあえずの大まかな見通しを提示しておきたい。一口で転生と言っても、いくつかのヴァリエーションがある。それを一つずつ見ていって、『浜松』の転生における特質を発見したいと思う。

転生と聞いて第一に連想するのは、ジャータカである。ジャータカは、争いあう二人の男性を代々にわたって設定するところに特色があるが、二人で一セットとみなせば輪廻転生の特色が明らかになると思われる。

シャカの場合は、次のように図示できる。

祖型↓A↓B↓C……(永遠の無限反復)……↓D↓シャカ(輪廻終了)

シャカと対立したダイバダッタ(デーバダッタ)の場合は、

祖型↓A'↓B'↓C'……(永遠の無限反復)……↓D'↓ダイバダッタ(輪廻終了)

ということになる。シャカやダイバダツタは、(祖型の反復)の最終形態であり、ここで転生は終了した。輪廻は断絶されたのである。しかし、シャカに潜む大きな虚構に、私達は気づかなければなるまい。祖型が反復を重ねてシャカに到ったのではない。実際にはシャカの存在こそが(祖型)なのであって、その祖型の(反復)をシャカの前世の姿であると強弁しているのである。シャカとダイバダツタから逆算して出来あがったのが、彼らの偽りの祖型なのだ。

現在を説明するための前世(祖型)は、現在を祖型として捏造されたものであったのである。ジャータカにおける転生の眼目は、あくまでも現在であって、現在で以て転生が終了したことを強調するものである。

次に、物語や説話における転生を見てみることにしよう。ここでは、浦島伝承と『長恨歌』の二つを考察してみることにしよう。

浦島伝承の本来の形態と主題については、拙著『御伽草子の精神史』(ベリかん社・昭63)を参照してもらいたい。人間の男性(浦島太郎)が異郷の女性(竜女・亀姫)と契るが、やがて帰郷する。二人は、住んでいる世界を隔てられる。男は、自らの生命と玉手箱を放棄することで、異郷に転生し、女と再会することができた。再び結ばれた男と女は、もう一度二人ながら転生して、地上の神となった。生命の放棄によって幸福な転生がもたらされ、二人はもう一度だけ転生するが二度と離れ離れになることはなかった。転生は終了したのである。

愛する男女の転生という点で想起されるのが、『長恨歌』及び『長恨歌伝』の記す悲恋の物語である。玄宗皇帝と楊貴妃をモデルとしたこの話は、やはり転生というモチーフを有している。人間の男女が契る。女は死去し、男女は幽明境を隔てられる。女は、仙界に転生する。男は女の情報を知り、自らの生命を放棄することで女との再会を願った。

玉妃茫然退立、若有所思、徐而言曰、昔天宝十載、侍輩避暑於驪山宮。秋七月、牽牛・織女相見之夕、秦人風俗、是夜張錦繡、陳飲食、樹瓜華、焚香于庭、号為乞巧。宮掖間尤尚之。時夜殆半、休侍衛於東西廂、独待上。上凭肩而立、因仰天感牛女事、密相誓心、願世世為夫婦。言

畢、執手各鳴咽。此独君王知之耳。因自悲曰。由此一念、又不得居此。復墮下界、且結後緣。或为天、或為人、決再相見、好合如旧。因言、太上皇亦不久人間。幸惟自安、無自苦耳。使者還奏太上皇。皇心震悼、日曰不予。其年夏四月、南宮宴駕。 (『長恨歌伝』)

女は、仙界(天界)に転生したものの、一念によって再び人間界に転生することになる。男も、玄宗という肉体を捨てて別の人間に転生することで、女との再会がもたらされる。二人の輪廻は、太古の昔から繰り返されていたであろう。

祖型↓A↓B……↓C↓玄宗(現在) ↓D↓E…… (無限反復)

祖型↓A'↓B'……↓C'↓楊貴妃(現在) ↓D'↓E'…… (無限反復)
繰り返される転生の途中が現在(現世)であるという建前である。もう少しで輪廻を断ち切り、二人ながら異郷に転生することが可能だったので、二人ながら現世で転生しつづけることになってしまったのである。

浦島伝承と少し似ているし、少し違ってもいる。最後に、『浜松』における転生を見てみよう。まず、式部卿宮の転生(父と子の問題)の場合。父は死に、唐に転生する。父と子は、日本と中国に住む世界を隔てられてしまう。しかし、子供(中納言)は命がけの航海をすることで父との再会を果たした。これは、生命の放棄による男女の再会を語る『浦島太郎』と同一パターンである。しかし再会は三年間のみで、子は帰国し、父は中国にとどまったのだ。一瞬で終わった再会という点で、李夫人の故事と似通うところもある。

次に、唐后と中納言の場合(男と女の問題)はどうか。唐后は愛する中納言に帰国されたあと、天上に転生して、男と世界を決定的に隔ててしまう。しかし、后は男に引かれ再び日本(現世)に転生する。男もまもなく死去して、どこかへ転生しようとしている。この構造は『長恨歌伝』と類似している。ただ『長恨歌伝』と比較してみると、『浜松』の方は男女の再会の確率が極めて少ないのである。詳しくは後考するつもりだが、中納言と唐后はそれぞれが転生してしまうことすれ違いの人生を生きることになってしまうのである。『長恨歌伝』の転生の構造を残しながら、いつまで

も結ばれえない(すれ違いの愛)を造型すると、『浜松』の世界が出現するのである。

〈転生〉を、もう少し広く解釈できるとするならば、宇治十帖の末尾も一種の転生譚であることがわかる。決して、大君が浮舟に転生したなどと言うつもりはない。浮舟の還俗や出家などを、現世への回帰・現世からの離脱という点で〈転生〉とみなしうろと思うのである。手習巻。薫は俗世(現世)に留まり、浮舟は出家として尼となり、別世界(法の世界)に生きる人間となる。即ち、象徴的な意味で浮舟は〈転生〉したのである。薫と浮舟は、生きる世界が隔てられた。やがて、薫が文使いを用いて交信してくる(長恨歌伝の幻士と対応)。薫と浮舟の愛の因縁を知らされた横川の僧都は、浮舟に還俗を勧奨したのであった。ここで宇治十帖は終わってしまったのだが、私は浮舟は還俗して薫とやり直すべきだと考えている(拙稿「浮舟のゆくえ」・『電気通信大学学報』35巻2号所収・昭和60・2参照)。浮舟は、再度現世に転生して薫と関わるべきなのである。このような宇治十帖の世界観(男女観・人間観)は、『長恨歌』、『長恨歌伝』の転生譚と類似するものである。そして、『浜松』とも、ある面で似ているのだ。否、逆であった。『浜松』は、宇治十帖の構造をある部分で拡大しながら継承し、ある部分を切り捨てることで受け継がなかった。女が転生して現世の男と再会し、そんな時点で終了した宇治十帖を、女が転生しても男が別世界に転生してすれ違ふ、というように『浜松』は改変しているのである。ここに、『浜松』の特殊性が指摘できるであろう。

『転生』について、あと一つだけ補足しておく。『天人五衰』の終わり方についてである。出家して尼となった女は、自分の過去(前世と言つてよい)の事実をすべて拒否してしまう。仏教の世界に転生する以前の俗世における男との愛を、彼女は全否定するのだ。幻士から玄宗の私信を告げられた楊貴妃が、玄宗のことなど知らない、と答えるようなものだ。そして、宇治十帖の終末部における通説(浮舟は薫を拒否して一人で生きてゆくべきだとする立場。私がこの通説に従えないことは、既述したとおり)も、このような(因縁を否定する女性)のパターンをよしとしているのである。

おそらく、男を否定した女は、一人で極楽へでも転生していくのであろう。彼女は、一人でだけ救済されるのである。しかし、男はどうなるのだろうか。はるかな過去から運命の糸によって結ばれ、二人で一セットの人生を形成してきた女性を、男はここで喪失してしまうのである。男の輪廻は断絶されず、かといっていつ転生が終了し果てるかもわからない。男が永劫にわたって愛執の罪に塗れて苦しんでいる時に、女は一人極楽で暮らせるものだろうか。もし暮らせるとしたら、そこは真の〈極楽〉ではないのではあるまいか。男に引かれて、女は現世に転生してくることになるのではないか。『天人五衰』の終わり方に、私は一沫の疑問を抱かずにはいられないのである。

3 巻一を読む

巻の一が開始した時、中納言は既に中国を目前にした船中の人である。中納言は、生きながらにして日本から中国へと〈転生〉したので。そして、別れた父親と再会することになる。しかし、運命に導かれて唐后とも結ばれることになった。唐后とは、父が転生した(唐の)三の皇子の実母なのであった。

3・1 大姫を回想する 唐に到着した中納言は、国に残してきた大姫のことが忘れられない。

そこを立ちて、かうしうといふ所に泊り給ふ。その泊、入江の水うみにて、いと面白きにも、石山のをりの近江の海思ひ出でられて、あはれに恋しき事かぎりなし。

別にし我がふる里のにはほの海にかけをならべし人ぞ恋しき

(一五三頁)

普通は、異郷で起きた出来事・異郷で見聞した文物を現世に立ち帰ってきたあとで反復するものだが、ここでは日本の祖型が中国で反復されているのである。日本の琵琶湖(にほの海)の反復としての唐のかうしうの湖。反復されるのは、自然だけではなかった。日本の大姫を恋しく思う中納言の前に、〈大姫の反復〉としての唐の女性が登場するに違いない。中納言と

大姫の初めての契りが都から石山への空間移動でもたらされたように、中国の女性と中納言との契りも唐の都から少し距離のある場所で行われることになるであろう。実際に、中納言と唐后は、河陽県の離宮ではなく山陰という所で逢瀬を持ったのである。

3・2 中納言の如意宝性、群を抜く 『浜松』には、物質としての如意宝が登場することがあまりない。けれども、主人公や女主人公を如意宝として造型するという物語文学の大原則だけは、堅持していると言える。かぐや姫、光源氏、藤壺（かがやく日の宮）など、光り輝く美貌と群を抜いた精神的美質の持ち主のみが、物語の主人公となりうるのである。それらは、彼らが如意宝（なかなんずく、その典型としての如意宝珠）の人間化した存在であることを示すものなのである。

中納言ひきつくるひて、いみじく用意し給へるかたちありさま、光るやうに見ゆるを、この国の人々めづらかに見たてまつりおどろきて、めでたてまつる事がぎりなし。

(一五四頁)

散逸首巻に中納言誕生の際の記述があったであろうが、中納言は生まれた時から光っていたはずだ。中納言誕生の時に、何らかの予言があったのではなからうか、という気がする。説話のパターンでは、霊夢を授かった両親が如意宝をも貰い受け、超人的資質を有する主人公を生むのだが、物質としての如意宝を好まない『浜松』であるから、霊夢で如意宝を貰い受ける場面は存在しなかったであろう。しかし、それに代わる何らかのお告げがあり、主人公の運命が提示されていたのではないかと思われる（唐后や大姫との契りによる子供の数、主人公の寿命）。

ちなみに、物語文学には「二つの玉」と仮に命名している強力な話型がある。相反する性格の二つの如意宝を同時に所有する人物が栄華を極める、というパターンである（拙稿「日本文学史の中の源氏物語」・『電気通信大学学報』36巻1号・昭和60・9参照）。桐壺帝の所有する藤壺と光源氏、山幸彦の所持するシオミツ玉とシオヒル玉などが、この話型に属することになる。美男と美女が互いに互いを求め合うのも、この「二つの玉」を形成しようとする営為なのである。さて、中納言は日本では大姫との間に「二

つの玉」の話型を実現した。その組み合わせに必然性があつたがゆえに、一夜孕みて子供が生まれたのである。そして、中納言は唐では唐后との間に「二つの玉」を形成しようとする。そして当然の如く、子供が生まれることになる。日本の「二つの玉」の話型が、唐においても反復されるのである。「二つの玉」の唐における所有者は、唐帝である。最大の美女を后として所有し、最高の男性を客人（遣唐使）として所有する聖帝のイメージがあるわけだ。中納言は、唐后と並ぶ男性としての如意宝として登場してくることになる。

唐の人々は、中納言を見て、「日本はいみじかりけり。かかる人のおはしけるよ」（一五五頁）と驚嘆する。そして、唐人と中納言を競争させてみるも、

題を出だして、文を作り、遊びをしてこころみるにも、この国の人に（中納言より）まさるはなかりけり。

(一五五頁)

というありさまだつた（このあたり、『吉備大臣入唐絵巻』と少し似ている）。唐人の常識では、唐が一流（祖型）であり、粟散国たる日本は二流（反復・模倣・亜流）でしかない。その日本に才能と美貌の双方において一流の人が存在したことに、彼らは驚いているのである。日本と唐の関係（どちらが祖型で、どちらが反復か）は、微妙に揺らいでいる。それは、世の中の真実のあやふやさ、人間存在の不可思議さとも似ているのではあるまいか。

3・3 中納言、三の皇子と対面す 中納言は、父式部卿宮が転生した唐の第三皇子と対面を果たした。三の皇子の顔つきは、前世の式部卿宮とは違っていた（「ありし面影にはおはせねど」一五六頁）けれども、前世の出来事はよく覚えていた。七、八歳の少年が自分の父親だったと中納言は信ずる。すべては、三の皇子の記憶（精神の連続性）が頼りなのである。くどいようだが、ここで再会を盛り上げるためにも、式部卿宮が中納言に残した形見の如意宝がほしかったと私などは思う。

ちなみに、顔が異なつていても心が同じであれば同一人物だとする発想は古い。『伊勢物語』という書名は、一説に『伊勢や日向の物語』の縮まった形だとされる。『伊勢や日向の物語』とは、同時に死んだ伊勢の人と日向

の人が同時に蘇ったものの、伊勢の人の魂は日向の人の肉体に入り、日向の人の魂は伊勢の人の身体に宿ってしまった、というあべこべの悲喜劇を描いたものであるらしい。たとえ異なる容器(肉体・身体)に宿ったとしても、中身(魂・記憶)が同じであれば同一人物である、という考え方だ。『浜松』の作者の考え方は、『伊勢や日向の物語』などとも共通するものがある。

3・4 作者、読者に唐絵を想起させる 『浜松』には、作者の老獪さ(それは、幼稚さと紙一重なのだが)の一つとして、唐の自然や文物の描写に困った作者が、読者に向かつて、「唐絵」を思い出してほしい、「唐絵」に画いてあるのと同じものですよ、と言いつ逃れる箇所がある。

そのありさまども、唐国といふ物語に絵にしるしたる同じ事なり。

(一五四頁)

上手の書きたりし唐絵にたがはず。

(一五九頁)

などであるが如くである。同様の表現は、一九一・二一四・二八四・二八六・二八七・三一九・三七〇頁などにも散見している。祖型として、作品以前(『浜松』以前)に存在していた作品外の「唐絵」に、全面的に寄り掛かった創作手法だと言つてよいであろう。

読者が有している常識や知識を、最大限に作者は活用しているのである。しかし、あくまで唐絵で連想されるのは、衣服や調度、自然などどうでもよいものばかりなのだ。容れ物の部分、飾りの部分に限られるのである。容れ物の中で生きている人間の魂の部分、絵に画けない部分に関しては、作者独自の描写が行われているのである。

3・5 中納言、唐后の美しさを称賛 三の皇子と中納言が再会した時、皇子の母である唐后も同席していた。二十歳くらいに見える唐后は、中納言の心に強い印象を与えた。

(中納言)「日本の人は、ただうちたれ、ひたひ髪もよりかけなどしたるこそ、わがかたぎまになつかしくなまめきたる事なれ」と思ひ出づるに、(后が)うるはしくかんざしして、髪上げられたるも、人からならければにや、「これこそめでたくさま事なりけれ」と見るに、……

(一五九頁)

中納言は、女性の美に関しても、日本をよしとし中国を劣るとする考えを抱いている。「なつかし」「なまめかし」などの形容詞が、日本人のうちたれ髪を美しいとみなす中納言の心情を表現している。しかし、唐后だけは例外であつて「日本が上で唐が下」という図式に当てはまらないのである。唐后だけは、「人から」であろうか、うるわしく見え、「唐が上で日本が下」なのである。

尤も、すぐあとで唐后の出自が明らかにされるのだが、唐后は父が中国人で母が日本人だったとされている。后には半分日本人の血が交つていたのであつて、唐人としての後の体の中を流れる日本的な部分に対して中納言が感応した、とも受けとれるのである。完全なる「唐が上で日本が下」図式ではないことに、注意しておきたい。

唐后の美貌は、唐后の回りの侍女までも余徳で格上げする。彼女らを天女に喩えることがなされるのだ。

若き女房七八人ばかり、「天降りけん少女こどものすがたかくや」と見えて

(一六〇頁)

……

「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」とよく似た発想である。天人の天くだったのが侍女で日本人より美しい、ということとは、作者の思念では、「①天上↓②唐↓③日本」という順位づけがなされていることを示している。しかし、その直後で唐人が和歌(五七五七七)を詠むとされているのは(一六〇頁)、日本の反復が中国である、という意味である。こちらは、「①日本↓②唐」という順位づけである。相反する二つの価値観が入り乱れ、錯綜しているのである。一体に、この物語は何が祖型で何が反復なのか(何が実体で何が鏡に写った虚像なのか)、はっきりしないことが多いのである。少し先走りすることになるが、『浜松』のヒロイン達を概観してみることにする。大姫の反復として唐后は登場する。しかし、唐后の比類のない美しさは、徐々に大姫の影を払拭し、祖型へと昇格してゆく。やがて日本に帰国した中納言は、唐后の反復としての(異父妹の)吉野姫を愛するようになる。「唐后」の位相も、このようように相対化して

いるのだ。彼女は、祖型であると同時に、祖型の反復でもある。

唐後の美貌は(そして、中納言の美貌も)、それ自体には大した意味はない。〈美貌〉は、あくまでも魂の容器としての身体の謂にほかならないから。美貌は、内面のおふれ出る精神性に由来しているのであって、その精神性の方こそが重要なのだ。そして、その魂の方はといえば、永遠に世々を転生する性格のものであったのである。唐后という存在は、転生を繰り返す魂の、ある時点における現われでしかない。前世と来世にはさみこまれ、現世だけで自立することはほとんど不可能なのである。ここに、唐后が〈祖型〉であると同時に〈祖型の反復〉でもあることの真の意味が発見できるであろう。

3・6 三の皇子、中納言に琴を与える 皇子は、中納言に琴を授けた。

皇子出で給ひぬれば、(中納言は)居なほり給ひぬ。(皇子)「おもしろき夕なり」とて、(中納言に)御琴ども取り出でて給はせたる。

(一六〇頁)

基本的には、父から子へと琴(楽器としての如意宝)が伝授される高藤型の話型なのである。しかし、この〈琴〉は物語内で何ら機能するわけではないのだ。この琴の力で中納言が大政治家に変貌する、ということはなかった。高藤型の話型を形成してゆくようなエネルギーを持った素材ではない、ということだ。〈琴〉が如意宝である例としては、大国主の神話があげられる。オオナムチは祖父のササノオから〈天の詔琴〉などの如意宝を盗み出し、スセリビメという正妻をも得た。『浜松』も、父から子へと琴の伝授があり、中納言と唐后も後に契ることになるわけで、骨格だけは一致しているのだ。しかし、『浜松』においては、物質としての如意宝はさほど効力を発揮しないのである。

如意宝の獲得が意味するのは、人格の完成(イニシエーション)だと考えられるのだ。未熟な青年が異郷を旅し、試練を乗り越えて成長し立派な大人へと成長する。美しく大きな心を獲得したことを、文学作品では〈如意宝の獲得〉で象徴するのである。その如意宝が『浜松』においては、かなり形骸化しているのだ。思うに、『浜松』は「イニシエーション」

に、さほど重い意味がないのである。人格の脱皮や人格の変貌に主題がある、というわけではないのだ。むしろ、転生が主たるモチーフであることからわかるように、〈変わらざる精神性〉の方に力点が置かれている。主人公の中納言が、最初から最後まで〈中納言〉でありつづけることも、何かしら暗示的である。登場人物が〈輪廻転生の断絶〉という一種のイニシエーション(解脱)を望んでいることは、事実であろう。しかし、精神性の不変に作者の視線が注がれている間は、中納言も唐后も永遠に転生を繰り返さざるをえないであろう。

3・7 唐后の出自 語り手は、問わず語りのようにして、唐后の血筋を語り始める。父は、唐の太宗の子孫である秦の親王であった。母は日本人で、失脚して筑紫に左遷された上野宮の娘(のちの吉野尼君)であった。

秦の親王が使者として日本へ遣わされた時に二人は結ばれ、一女を儲けた。それが、唐后である。秦王は唐后を連れて唐に帰国し、母(吉野尼君)は日本に残り数奇な人生を辿ることになる(一六一頁)。

吉野尼君は、源氏物語の玉鬘と少し似ている。玉鬘も、筑紫をさすらった美女だからである。上野宮が筑紫で死去したように、玉鬘も庇護者たる太宰の大式に死なれてしまう。

いとかすかなるめのことにつきて、京へもえのぼらでおはしけるを、

(一六一頁)

という唐后の境遇は、限りなく乳母と共に筑紫をさすらった玉鬘と類似しているのである。

〈筑紫〉は、この物語では両義性を帯びている。日本の中では、最辺境の地であり、都からは最も遠い所である。しかし、唐とは最も近い場所なのでもある。唐人が最初に到着し長期滞在する所なのだ。二つの文化圏の境界線上に位置するのが、筑紫という空間なのであった。

吉野尼君も、境界線上を生きた女性であった。筑紫において秦の親王との間に一女(唐后)を産み、上京して帥宮との間に更に一女(吉野姫)を産んだ。日本と唐のそれぞれに、美しい娘を一人ずつ残すことになったのである。吉野尼君は、境界線上に位置する。現世と来世、此岸と彼岸、転

生と往生の境界線上にもいることが、後に判明することになる。

吉野尼君が父と共に筑紫へ左遷されてきたのは、秦の親王と結ばれ(唐后)という貴種を産むためであった。唐后は、「玉ひかる女」(一六一頁)と描写されているが、これは彼女が如意宝の典型たる如意宝珠(夜光の玉)であることを示している。尼君の流離は、如意宝をこの世に作るために存在した。源氏物語の光源氏の須磨流離が、夜光の玉にも喩えられる明石の姫君を作るために設定されていたのと同じである。尼君も光源氏も、(契り)によって辺境を流離する必要があったのである。まだこの世に生を享けていない如意宝が自らに形を与えるべく、父や母を辺境の地に呼び寄せたのだ。

「玉ひかる女」とされた唐后は、ではどのような点で如意宝たりえたのだろうか。彼女は中国へ渡って成長し、後の地位に昇った。如意宝は、地位の上昇を可能にするものである。しかし、彼女が后になっても父に幸福をもたらさず、本人自身も他の后達から迫害されて苦しむことになる。彼女が如意宝としての救済性にやや乏しいところのある(暇のある玉)だった、ということだろう。しかし、その苦しみの中から彼女は三の皇子を出産する。この皇子(中納言の父の転生)は、東宮に据えられ、やがて即位することが確実である。想像をたくましくすれば、三の皇子は即位後に日本から后を迎え、そのお返しとして唐を代表する如意宝を日本へ贈るのではないかと、という気が私にはする。謡曲『海人』・幸若舞『大織冠』と類似するパターンになるのではあるまいか。ともあれ、唐后は、自分の苦悩を代償として我が子を即位させる如意宝なのである。かつ、唐后は、中納言に吉野尼君(母親)を引き合わせた。そして中納言が吉野姫を後見する素地を作つてやったのである。吉野尼君は、この世に娘を一人残すことを未練とすることなく、安心して極楽往生を遂げた。唐后は、唐にいながらにして、日本の母を往生させたのである。これも、彼女が如意宝だったことを証しだてるものであろう。

3・8 唐后、少女時に海を渡る 唐后が五歳になったとき、父は彼女を連れて唐へ帰国した。母は、日本に留まったのである。父が五年も帰国を

逡巡したのは、女性が海を渡つた前例がないからであった。

また(唐后を)率て渡らんには、させまろといひける者、うなはしといひける人を率て渡りけるに、海の中の竜王のめめて、船をとどめけるにわびて、海の中に畳を敷きおきてける後、女はかよふ例なし。

(一六一頁)

この悲劇は、ヤマトタケルとオトタチバナヒメの神話と話型的に一致するものである。美女(如意宝)が海を渡る時、竜王に奪われてしまう。美女の側からみると、自らの生命を竜王に差し出すことで愛する夫の生命を助ける、という自己犠牲のパターンになる。これは、前にもでてきた『海人』『大織冠』の世界そのままである。面向不背の玉という如意宝が中国から日本へ渡来する時、竜に奪われてしまう、一人の海女の生命の犠牲の上に藤原不比等(夫)が如意宝を奪回する、というのが『海人』の構造だからである。女性の犠牲の上に男性が如意宝を獲得する話型を、私は『海人型』の話型と仮称することにしてある。詳しくは、前掲拙稿「日本文学史の中の源氏物語」を参照していただきたい。

唐后(女性)を連れて帰国する決心を父がしたのは、

「はやく率てわたれ。これはかの国の后なれば、平らかに渡りなん」

(一六二頁)

という竜王のお告げがあったからであった。「させまろ」の悲劇という祖型の呪縛から、唐后は解放されたのである。しかし、これを以て新しい祖型の創出とすることはできない。唐后の母は、海を渡れなかったし、唐后以後も女性には渡唐できなかったと考えられるからだ。男性である中納言が無事に渡海できたのも、「孝養の心ざし」(一五三頁)が深かったから運が開けたためなのであった。唐后の場合は、ただ一度の例外であるのだろうか。

なお、唐の後が日本から海を越えて渡つてゆくというのは、『海人』『大織冠』の冒頭の設定である。『海人型』の話型の典型たる『海人』の成立と、『浜松』のこの箇所とは何かしら関連・連動しているのではあるまいか。

考えてみると、唐后も(母親)の犠牲の上に渡唐でき、後の地位にまで昇ることができたのである。日本にただ一人残された母親の苦しみ、夫と

娘を同時に喪失した彼女の心中を、私達は察すべきだろう。更には一人日本に残された彼女が上京し帥の宮と関係するのは、彼女が竜王に取られてしまうことの話型的変換だと解せないこともないのである。『浜松』では日本に母は留まり帥宮と関係し、父と娘は唐へ渡る。これは、ウナハシが竜王に我が身を差し出すことで夫を渡唐させる話や、海女が死亡して夫と子供を都へ返し繁栄させる話と通底しているのである。

3・9 唐后、十四で唐帝と結婚 彼女の「たぐひなくめでたき」容貌を聞こし召された帝は「にはかに御行し給ひて」、十四の年に彼女は楊州の都に入内することになったのだった(一六二頁)。ここには、『竹取物語』の狩の御行のイメージがある。『竹取物語』では帝とかぐや姫は結ばれなかったのだが、本来の竹取説話では二人が結ばれていたと想定されるのである。

唐后には、かぐや姫のイメージがある。唐后は、日本という異郷から唐へ渡ってきた美女であるし、かぐや姫は月世界という異郷から地上へ下りてきた天女であった。どちらも、異郷から来た女性なのである。そして、どちらもが光り輝く美質を持ち、見る人の心を憧らせる如意宝なのであった。

3・10 唐后、三の皇子を産む 后は十六歳で帝の第三皇子を出産した。しかし、他の后達の迫害によつて都には住めず、河陽かわやう県の離宮で暮らすことになった(一六二頁)。この箇所における唐后のイメージは、桐壺更衣である。遅れて入内した美女に帝の寵愛があつまり、先に入内した後達が嫉妬しいやがらせをするのだ。唐后も桐壺更衣も、〈苦しむ女神〉へ救済さるべき救済者」というパターンに含まれる女性なのだろう。他者から迫害され虐げられることで、いよいよ光を放つという女性なのである。

唐后のあるべき場所は、宮中ではなく河陽県であった。対する帝は、宮中こそが当然帝の存在すべき居場所である。その宮中では唐の后は幸福にはなれなかった。即ち、二人は住むべき場所(如意宝を保管すべき容器)が違っていたのだ。唐后と帝は、理想的な組み合わせではありえず、二つの玉の話を形成することができない。にもかかわらず二人の間に子供ができたのは、宿命のなせるわざだったというしかあるまい。日本人の転

生した人物を唐の次の帝位に即けるため、中納言を理想の美女(唐后)と出会わせ二人の間に子供を作るため、唐后——三の皇子」という母子関係が必要とされたのである。帝と后の夫婦関係よりも、母子関係の方が優先しているのだ。

なお、如意宝には、あるべき場所に存在しないと所有者にたたりをなすという奇妙な特性がある。唐后は河陽県に居てこそ、帝の后なのである。彼女が河陽県を一時的に離れて山陰さんいんに赴いた時、中納言との間に密会が持たれた。唐后があるべき居場所を逸脱したために、唐帝(如意宝の所有者)にとつては好ましくない出来事(後の密通)が生じてしまったのである。

3・11 唐后、日本の母を恋う 唐后は、成長するに及び、日本に残された母親を恋慕う情が高まった。

やうやうおよすげ給ふままに、「母宮いかになり給ひけん」と、東の山際やまぎはをながめつつ、このよの中あらまほしうもおぼされず、もののみ哀れに心細くおぼされけるに、…… (一六三頁)

というありさまであった。ここでも、母から娘へ託されるべき形見の如意宝が存在しない。唐后は母の形見である鏡や釵などを見ながら日本の母をしのんだ、とでもありたいところである。

さて、唐后の心の中の動きは、中国から日本の母へと向かうものである。一方、中納言の心の中は、日本から唐の父へと向かうものである。相反する二つのベクトルがやがて出合い、中納言と唐后は結ばれることになる。

3・12 唐后、母と同国人の中納言を人やりならず思う 唐后の生い立ちをめぐる長い回想がやっと終了する。中納言と唐后が出合ったあとの時間(物語内の現実の時間)へと、作者の筆は戻つてゆく。

心にかかりてゆゆしくおぼつかなく思ふかたの人ぞかし。

(一六五頁)

というのが、中納言を見る唐后の気持ちであった。中納言は、唐后にとつて母を思い出させるよすがなのである。一種の「へゆかり」であり「形見」でもあるのだろう。中納言が母と同国人であるために、母の形見でありう

るのだ。

又、中納言は、唐后にとって母の形見であるにとどまらず、子供の三の皇子の前世における子供なのでもあった。子供（三の皇子）ともつながっているのであり、中納言と唐后は縁浅からぬものがある。三の皇子が母である唐后に、

（中納言を）御心にも疎くな思しめしなさせ給ひそ。（中納言が）久しくも侍るまじかなれば、帰りなんのちの名残のおほきなん、かねて思ひ侍る。（一六六頁）

と語る場面は、『伊勢物語』六九段の狩の使を連想させるところがある。『伊勢物語』では在原業平が伊勢に狩の使に立つのだが、伊勢斎宮に対してその親が「つねの使よりは、この人よくいたはれ」と言ってきたために、二人はねんごろになり、神に奉仕すべき神聖な斎宮と俗人の業平とが密通してしまふことになったのである。大事に世話すべき人と女性が一夜の情事を行い、それによって懐妊した子供を秘密裡に出産する、というパターンが、『伊勢』と『浜松』とに共通しているのである。

3・13 三の皇子、自らをへにさうの人と規定する 三の皇子に関して、「にさうの人」という言葉が二回用いられている。

（皇子）「にさうの人など、おどろおどろしう人の言ひなし侍るも……」（一六五頁）

（后）「にさうの人におはしますとは、おのづから見たてまつれど……」（一六六頁）

大系の頭注（一六五頁の注四〇）は「似相の人」の意かとするが、そうではあるまい。第一、三の皇子は前世の容貌とは全く違っているのだから（3・3参照）、三の皇子と中納言の顔つきが似通っているはずがない。一九四頁〜三行でも、二人の顔つきが似ていない（皇子は中納言の父であった式部卿宮と違う顔つきをしている）と、暗示されているとおりである。

この箇所は、むしろ『竹取物語』の、

（翁）「我が子の仏、変化の人と申しながら、……」

（かぐや姫）「変化の者にてはべりけむ身とも知らず、……」

などと類似しているのであって、三の皇子の超越的資質を示す表現だと考えられるのである。即ち、「にさうの人」とは「二相の人」であり、二相を悟る人、前世と現世の二相を知っている人、現世に生きていながら前世での人生をも記憶している人の意ではあるまいか。三の皇子は、昔（祖型としての日本）と今（唐）とが錯綜しているのである。しかし、皇子が釈迦など輪廻を終了した聖者と違っているのは、記憶が溯れるのは前世まででそれから前へは戻れない、という点である。皇子が「二相の人」であるゆえんである。釈迦はどこまでも記憶を溯らせることができる。

3・14 皇子、転生の理由を語る 皇子は、母に次のように語った。

この中納言、前の世の子にて侍りき。ただ一人侍りしかば、たぐひなくかなしく思ひ侍りしにより、九品の望みもこの思ひにひかされて、かく生まれまうできたるとなんおほえ侍る。（一六五頁）

一中納言への思いゆえに、極楽往生をあきらめた（往生できなかった）、というのである。肉親の情ゆえに転生して、人間として再び苦しみに満ちた人生を生きたことになったのだ。逆に言えば、あえて苦しい人生を生きてつづけることを決心してまで（極楽で安穩に暮らすことを放棄してまで）、肉親との再会を願ったということである。その再会が、たとえ一瞬であったとしても、それで十分なのである。父と子の血のつながりの強さを感じられてならない。三の皇子にとっての絆が妻ではなく（妻は既に再婚済みである）、子供であった点が面白い。（高藤型）の話し型なのである。

3・15 皇子、日本の中納言を呼び寄せる これは、異郷に存在する如意宝が、現実世界の人間を引きつける、というパターンである（例えば、一寸法師が鬼ヶ島に漂着したのも、打出の小槌という如意宝が一寸法師を力で引きつけたのである）。中納言は異郷たる唐で如意宝を獲得し、それを日本へ持ち帰ることになるであろう。ただし、その如意宝は三の皇子ではなく、中納言と唐后との間にできた実子（子宝）なのである。この子は将来、日本国のかための重臣となつてゆくことであろう。

中納言の渡唐は、唐后との交会を前提としているのである。唐の人々は、

競つて娘を中納言に差し出そうとする。

さて子を産みいでたらば、かばかりいみじき人の名残を留めたらんは、えも言はざる事なり。(一六九頁)

という見からである。そして、これが実は中納言と唐后との契りでもあることには気づく必要があるだろう。

中納言の側からみると、異郷で童女と結ばれ三年間楽しく暮らし、別離に際して子宝を持ち帰る山幸彦などのパターンである。唐の人々の側からみると、日本という異郷から来た男性(神)と唐の女性(人間の巫女)との間に神の子が生まれる、という神人通婚のパターンになる。

宝を持ち帰るといふ点についても少し補足しておく、中納言と唐后との間の密通の子供は、最初から日本へ渡ることが決定されているのである。中納言の実子を唐帝の子供と偽り、東宮に立て、更に即位させる、そのすべを見守つてから三の皇子は極楽往生する、という展開にはならないのだ。『源氏物語』の冷泉帝、『伊勢物語』九段の背後にある罪の子陽成帝(業平と二条の后の子)など、罪の子が帝位に即く話が多い。しかし、『浜松』はそうならないのである。三の皇子は唐帝として即位し、中納言と唐后の子は日本へ渡る、という筋道を辿つてゆくことになるのだ。

3・16 唐后の父、深山に隠栖す 唐后の父は娘を入内させはしたものの娘も本人も世の中からはしたなめられ、深山(蜀山)に隠遁してしまつてゐる(一六六頁)。これは、唐后が自分をめぐる人々にすら幸せをもたらさない(取つた如意宝)であることを示すものである。と同時に、唐后の父は、自ら世を逃れることで娘とその子供の繁栄を願つたのである。『源氏物語』の明石入道が一族に皇子が誕生したのを見届けてから奥山に入山したように、后の父も自己を犠牲にすることで后と第三皇子の行末の幸福を祈念したのである。誰かの幸せの裏には、誰かの不幸せがなくてはならない。唐后は、かつて母親の犠牲によつて渡唐することができた。そして、今度は父親の犠牲の上に后としての地位を保つことができたのである。唐后の救済者としての性格は、限りなく後退してゆく。

3・17 大姫の夢 中納言は、日本に残してきた大姫の夢を見た。中納言

と唐后の愛の物語の中に、かつての中納言と大姫の愛の物語の結末が挿入されているのである。中納言と大姫の物語が、今唐において反復されようとしているのである。むろん、大姫の単純な反復が唐后になる、ということではない。唐后の物語には、大姫と中納言の物語を交差させた特殊性も付け加えられるに違いない。しかし、大姫の「一夜孕み」という重要なモチーフは、唐后の物語にも反復されることになるであろう。

さて、夢に現われた大姫は、

誰により涙の海に身を沈めしほるるあまとなりぬとか知る

(一六七頁)

という和歌を口ずさんだ。この歌は、大姫が出家して尼になったことを中納言に知らせるものであった。彼女の出家は、散逸した首巻に既に書いてあったのだろう。読者は、前もつてその事実を知っている。物語内の時間は中納言出発後の日本の出来事(大姫の出産、出家など)を首巻で説明してから、巻一では少し逆行して中納言の渡唐時点まで溯つたのである。この大姫の夢の時点で、巻一の時間は散逸首巻に追いつくことができた。散逸首巻と巻一は、所謂「並びの巻」なのである。

さて、大姫の歌は、「海女」と「尼」の掛詞になつてゐる。これは、彼女が「海女」であること(海人型の話型に属すること)をも象徴しているのではあるまいか。自分を犠牲にして他者を幸せにしようとする女性が、大姫なのだ。

大姫の話と唐后の話とが重層していることには、どういう意味があるのだろうか。中納言は、日本と唐の双方で子供を作ることになつた。在原業平は、都において二条の后との間に陽成天皇を作り、伊勢において齋宮との間に高階師尚を儲けた。光源氏は、都で葵の上と結婚して夕霧を作り、明石では明石の君と結ばれ明石の姫君に恵まれた。『浜松』の中納言も、日本(都)と唐(異郷)の双方で子宝に恵まれたのである。

中納言にとつては、大姫も唐后もどちらも大切な女性である。彼は後に「この世もかの世も、なのめならぬ思ひにまどひて……(二〇六頁)」と述懐することになるが、これは大姫と唐后の並立状態を示すものである。都の

女性と異郷で知りそめた女性。これは『伊勢物語』の「むさしあぶみ」(一三段)のパターンであり、『源氏物語』の紫の上と明石の君の關係でもある。紫の上は子供こそ作らなかつたものの、大姫とかなり共通する側面があることが、徐々に判明してゆくであろう。

中納言は、大姫の夢を見て目覚めた後、

日の本のみつの浜松こよひこそ我を恋ふらし夢に見えつれ

(一六八頁)

という歌を誰にともなく独詠した。これは『浜松中納言物語』(別名「みつの浜松」という物語名の由来を示す箇所でもある。「みつの浜松」は、大姫のことを指している。のみならず、中納言の歌が、『古今集』の、

さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫

と酷似していることも重要であろう。この古今歌は、『橋姫物語』という古い伝承と関わるものであり、ここでは本妻(前妻)と妾(後妻)の二人の女性が登場するのである。『橋姫物語』は〈二人妻〉説話なのである。古今歌と中納言歌が類似しているのは、大姫と唐后とが中納言の〈二人妻〉であることを語るためだと考えられるのである。大姫が本妻、唐后が後妻に該当する、ということだ。

3・18 中納言、唐で新年を迎える 中納言は、初めて唐において新春を迎えた。

年立ちかへりぬる朝の空は、いづくもかはらぬものなれば、霞める空も鶯の音も、春やむかしのとのみ思ひまがへたるにも、去年のこの頃の人々の御気色ども思ひ出づるに、あはれに恋しきなぐさめに……

(一六八頁)

中納言は、唐の新春を通してその背後に去年までの日本の新春を透視している。「春やむかしの」と『伊勢物語』四段(月やあらぬ)が引用されているのは、空のようすも鶯の声も日本と唐とで少しもようすが違わないことを強調するためである。「唐日本」なのだ。しかし、現在の中納言の目の前には、去年の新春一緒にいた愛する人々が存在しない。日本と唐とは、異なっている。隔てられている。この二面性は、中納言から離れることが

ないのだ。在唐時は大姫のイメージが、日本に帰国後は唐后のイメージが中納言の頭から消えないのである。世の中は、重層している。

3・19 中納言、桃源郷を実見する 陶淵明の『桃花源記』で有名な桃源郷を、中納言は訪れた。これまで中納言は日本にいて「文のことども」(一六九頁)で見るとはなかつたのだが、運命によって渡唐し実見することができたのだ。はるかなる祖型が中国にあり、様々の文学作品で反復されつづけて日本にも到り、やつとのことで自分は知ることができた。しかるに、今や、中納言はそもそもその祖型に辿り着くことができたのである。中納言は、祖型上の人物(伝説上の人物)に昇格しようとしている。「われながらめづらしく、人より殊におぼし知らる」(一六九頁)とは、そのような自分の運命を自賛している表現なのである。なお、桃源郷は本当は架空の地名であり、実在することはない。これは『浜松』作者の無知にのみ責任があるのでなく、物語文学における〈祖型〉がそもそもすべて虚構であるということまで暴露しているのである。

なお、『桃花源記』は、異郷(ユートピア)で、人間の男と仙女(天女)が契りをこめる、という構造を持つ。祖型上の人物となつた中納言は、唐で美女と関係することになるであろう。「天女」は唐后以外には考えられないが、『浜松』は中納言と唐后を結び合わせる前に、狂言回しとして唐の一の大臣の五の君という女性を登場させる。五の君は、ミニ「天女」とでも言うべき女性なのだ。

3・20 五の君の純愛 五の君は、紅葉の賀で中納言を垣間見て恋の病に臥してしまふ。驚いた父大臣が娘に真相を尋ね、中納言を娘と対面させようとしたのだ。『伊勢物語』四五段(行く螢)と少し似た状況設定である。四五段では娘は死ぬ直前に昔男への恋情を打ちあけるのだが、『浜松』の五の君はまだ重態に陥る先に中納言への思いを親に告げたのだ。又、『源氏物語』の朧月夜とも類似するところがある。右大臣の娘(↓一の大臣の娘)、花の宴(↓紅葉の賀)など似ているのであり、父大臣の許さぬ仲を(父大臣の公認する仲)へ転換すると五の君が造型されるのだ。

大作家における中納言のイメージは、

(大臣)「まことにかの人(中納言)を見れば、やまひも止み命も延びぬべきさまし給へる人なり」(一七〇頁)

とあるように、病を癒し寿命を延びさせる如意宝そのものなのである。中納言という如意宝の光を浴びると心地は安らぎ、彼がいなくなると苦しくなる、というのだ。

3・21 一の大臣の広大な邸宅

この家のいきほひ、いみじくつくりかざられたるさま、内裏にことならず磨きたてたり。(一七一頁)

と描写されているように、宮中とも見紛うばかりのありさまだった。臣下でありながら皇帝にまさるとも劣らない富と権力を蓄積していたのである。ここには、微妙に隠蔽されているものの、〈朝廷〉と〈朝廷を詐称するもの〉の対立というモチーフが存在すると思われる。皇帝一族と一の大臣一族は拮抗する勢力を持ち、正面から睨み合っている。このパターンを、私は〈四天王型〉の話型と称している。詳しくは、前掲拙著『御伽草子の精神史』第二章(酒呑童子論)を参照されたい。中納言は、竜王と大呉公の闘いに巻き込まれた倭藤太と同じ立場にある。倭藤太は竜王に協力して、大呉公を退治した。はつきりと表現には明示してないけれども、中納言は皇帝側に立ち(彼の父親が皇帝一族に転生しているからである)、一の大臣を抑える立場にあると考えられる。日本から唐にわたった青年が皇帝を援助し逆賊を平定する『松浦宮物語』は、『浜松』に伏流していた〈四天王型〉の話型を極限まで拡大したものである。

中納言が唐に滞在中は一の大臣は謀反を起こさない。まもなく、一の大臣の外孫である一の皇子(現東宮)が即位するからである。しかし、運命は、一の皇子の在位期間を短くさせ、代わって三の皇子(中納言の父の転生)を即位させることである。中納言の一族の力で、一の大臣家の専横が抑えられるのである。即位した三の皇子は一の大臣家から后を立てずに、大臣家の力を失わせてゆくことであろう。

3・22 五の君のありさま 一の大臣家のありさまも五の君の雰囲気も、すべて唐の流儀であって、日本的なるものは全く感じられなかった。

…世(日本)にはたがへる事なりかし。(一七二頁)
この国(唐)のやうは、つくるふ事なく物いふなるべし。(一七三頁)

我が世のいみじく飾りつくるふならひに、(中納言は)いとをかしう打ち笑はれて……(一七三頁)

などがあるが如きである。これは、日本人の血を半分引いた唐后や、日本人の転生である三の皇子が、そこはかとなく日本の雰囲気を感じさせていたことと対照的である。中納言は、渡唐して二つの理想郷を實現したのである。日本的な理想郷(唐后によって代表される)と、中国的な理想郷(一の大臣によって代表される)の二つである。そして、二つの理念の角逐に際して、前者の側(唐后)の方を選択したのである。日本での祖型(大姫との一夜契り)を反復すると言っても、それは唐后とのみなのである。五の君とは、実事はなかったのである。

逆に言うならば、一の大臣的な人生観(五の君と結婚することで中納言は自分のものとする)ができる。中納言が行きつまった時に模索すべきも一つ(五の君の人生の可能性を内包するもの)もあるのだ。藤壺との愛に行きつまった光源氏が、敵対する右大臣家の娘である朧月夜と関係すること(五の君を打倒しようとしたのと、同じこと)である。

3・23 中納言、五の君に笛を残す 中納言と五の君の間に実事はなかった。

持ち給へる笛を形見にととどめて、あけもはてず帰りに給ひぬ。恐ろしと聞く人(大臣)の心やぶらじとばかりに、そののちも消息など聞え給ふ。(一七四頁)

中納言の〈心〉は、五の君の許にはない。しかし、〈心〉に与えた〈形〉であるはずの形見の如意宝はしっかりと存在している。これは、どう考えるべきだろうか。

中納言は五の君とは契らなかつたので、一夜孕みはありえず、この如意宝は中納言が生まれる子供のために残したということはない(高藤型の話型ではない)。五の君に、自分のいない時はこの笛を自分と思つて心を慰

め具合を悪くすることのないようにせよ、とでも言い残したのだろう。即ち、〈中納言と五の君〉の関係(男と女の関係)を象徴するような如意宝なのである。それなりの〈契り〉が、二人の間には存在したことになろう。

『浜松』の作品末で五の君の出家が中納言にも伝えられる。中納言の人生も、まもなく終了しようとしている。たぶん中納言は唐に転生し、何らかの形で五の君と関わるのではあるまいか。私には、そういう気がする。

3・24 中納言、唐后との逢瀬を祈る さて、中納言は目下のところは唐后への思いで頭が一杯である。彼は、靈験あらたかだという噂の菩提寺という寺に参詣して、

河陽県の後、今一度見たてまつらん。

(二七五頁)

と祈ったのだ。石山寺の靈験で大姫と結ばれた過去が、今、唐でも回復されようとしているのだ。菩提寺は、石山寺と構造上対応するものである。更に、巻五では式部卿の宮が吉野姫を清水寺で領略する場面があるが、この「清水寺」も男女を結びつける機能を果たしていることが知られよう。

中納言は、夢の中で僧から、

今一めよそにやはみんこの世にはさすがに深き中のちぎりぞ

(二七五頁)

という和歌を詠みかけられる。説話であれば、何かしら物質としての如意宝を神仏から貰った、とでもあるところである。中納言の見た夢告は、夢自体が如意宝だったのである(あるいは、和歌が如意宝だったのである)。中納言と唐后とのたった一夜の逢瀬が、〈夢〉という不確実な手段(作者から見ると、確実きわまりない手段)によってもたらされるのである。

3・25 中納言、山陰に赴く 中納言は、王子猷の故事で有名な山陰を訪れた。『桃花源記』の舞台を実見したのと、同じような行為である。王子猷は、月を眺めて船を漕いだのだ。「昔この所に住みける王子猷といふ人の、月のあかりける夜、船に乗りつつ遊びし文作りける所」と記されている(二七六頁)。中納言は山陰の月(名所の月)を見ながら、去年の春日本で見た月を思い出す。

去年の春かやうに月のあかりし夜、式部卿の宮にまゐりたりしかば、

いみじう別れをしみ給ひて、「西に傾く」との給ひしその面影、かたがた思ひ出づるに、涙もとどまらず。(一七六頁)

又、「浅みどり霞にまがふ月見れば見しよの空ぞいとど恋しき」(一七六頁)とあるのは、現在唐で見ている月のことである。大昔の月(A)、昔の月(B)、現在の月(C)と、短い範囲内にさまざまな「月」が書き分けられているのだ。けれども考えてみれば、月はもともと一つのものである。その同じ月がさまざまに変転して、今中納言にも見られている。これを少しだけ視点を変えると、前世での男女関係(A)↓日本での大姫との愛(B)↓現在の唐后との愛(C)という愛の種々相になってくる。今、中納言は運命によって唐后と結ばれようとしている。

中納言は、童と歌の贈答をした。

7 (童) あすまでの命も知らず今宵こそあまてる月のかげもよく見めん

(中納言) 月影の浮べる水はくむまでにあはれいく世をながめ来ぬらん

(二七七頁)

この童の歌は、夢告の中の僧の歌と同機能であり、中納言が、「あすまでの命も知らず」(「充実した時を求めて」)「あまてる月かげ」(「唐后」)を実見することを予告しているのである。中納言の歌の方は、月ばかりでなく〈月を写す水〉も、大昔・昔・現在と同じものが反復・継承されてきたことに気づき驚く気持ちを表現している。自分自身(水)が転生を繰り返した幾世にもわたって唐后(月)を思いつづけてきたことへの無意識の感動なのだ。月を浮かべる水とは、はるかにして高貴な女性を男性が思いやることの象徴であろう。『冷泉家流伊勢物語抄』は、『伊勢物語』九段(東下り)の「三河の国八橋といふ所にいたりぬ」に関して、

三河の国と云は、三人を恋奉る事也。三の河は三の水也。三の水の心也。心と水とをば、内典にも外典にも心水とて、同物といふ也。

と注している。水を心(更には、女性への恋情)の象徴と解する点は、『浜松』をも照射するものであろう。

3・26 中納言、琵琶の音を訪ねる 月を眺めている中納言に「おもしろきびはの音」が聞こえてきた。その音の源を訪ねて、彼は「山のふもとな

る家」を発見した。この家には、唐后が物忌と称して遊びに来ていたのだつた(二七七頁)。「琵琶」は、男女をめぐりあわせ結びつける機能を果たしている。一種の如意宝と言えないこともない。

楽器によつて女性の許へ到るのは、『平家物語』の小督などのパターンである。神話や民話には、米のとき汁や箸、煙などで人家の存在を知るものもある。

3・27 唐后とよく似た女性を見て契る その家には、美しい女性がいた。

主なるべきと目をとどめみるに、ほのかなるかたはら目の、世に知らずめでたき月かげ、河陽県の後の菊見給ひしゆふべのやうに、ふと覺えたり。(二七七頁)

「唐后がたぐひあらじと思ひわたるを、かう似たてまつりたる人こそありけれ」(二七八頁)

奥山で、愛する高貴な女性と生き写しの女性を発見するのは、光源氏が北山で藤壺のゆかりである紫の上を見つけたのと同じパターンである。しかし、中納言が見つけた唐后そっくりの女性は、唐后本人だったのである。中納言はそれを知らない。そして、中納言は、女と契つた。

心もそらに乱れて、さるべきにや、後の行くさきのだよりもなくなりて、やうやう人しづまるほどに入りぬ。(二七八頁)

中納言の側からみると、大姫の反復としての唐后、その唐后の反復としての山陰の女、という構造になるであろう。祖型の反復のその又反復として、今宵の「月」(『山陰の女』)はある。何がそもそもその祖型で、何が反復なのか、きわめて漠然とした状態に中納言は置かれている。山陰の女は、鏡に映つた鏡の中の人物なのである。

対する女の方はどうか。唐后およびその侍女は、男が中納言であることを見破り、

「いふかひなし。誰とだに知らせで止みぬるわざをせん」
「我とだに知らせで止みなん」(二七八頁)

という決心をしたのだ。女の方は、自分の契つた男の正体を知っている。女の視点の優越、真実に到らぬ男の視点の劣位という点では、『松浦宮

物語』とも似ている。しかし『松浦宮物語』とは違って、女(『唐后』)は自分の前世や来世の予知能力は持たない。この一夜契りによつて懐妊することになるという近未来すら、わかつていないのである。その点では、男と女は五十歩百歩ではある。

3・28 逢瀬に際しての中納言の思い 中納言は、山陰の女に日本的な雰囲気を嗅ぎとる。

これ(『山陰の女』唐后)はすべて近きありさま、わが世(『日本』)の人に露ばかりたがふところなく、……(二七八頁)

もう少しあとで、中納言が唐后の父大臣と対面する場面でも、これはすべて、いささかあらぬ世の人とおぼえず、ただわが世の人にたがふ事なし。(二九〇頁)

と書かれている。日本(我が世)の反復として、唐(この世)がある。唐(現在)の中に存在する日本的な部分(祖型)に、中納言は反応したのである。我が世にもまだ知らざりしかか月のかかる別れにまどひぬる哉(二七九頁)

中納言が契りの翌朝、詠んだ歌である。ここでは、山陰の女との契り(この世)は日本でのそれ(我が世)と比べものにならぬほど心乱れるものであった、とされている。反復としての女性が、祖型をもしのいでいる、という逆転の発想である。山陰の女(唐后)との契りが、中納言にとっては「新しい祖型」となるだろうことが暗示されているのである。

その一方で、中納言は山陰の女に大姫のイメージをも重ねている。(山陰の女が)うち泣きたるさまのあはれげなるに、さらに立ち別るべき心ちもせぬにつけても、大將殿の姫君の御事、ふと思ひ出でられてこひしかりけり。(二八〇頁)

中納言にとつては、二つの「祖型」がほぼ同じ比重を持っているのである。日本で大姫と契り一女を儲けるという「旧祖型」、唐で唐后(山陰の女)と契り一男を儲けるといふ「新祖型」。二つの祖型が錯綜し、二組の宿命と因縁の糸が絡みあう。

なお、この時の二人の別離に際しても、男から女へ(父から女の胎内の

子へ伝えられる如意宝はなかった。しかし、女の持っていた香(袖の香)が男に移ったので、女から男へ香りという目に見えぬ如意宝(再会の手がかり)が伝達された、と解することもできよう。

3・29 山陰の女の正体を知ろうとする中納言 正体を隠し通そうとする唐后は、中納言に嘘の住居を教える。中納言は女の素性を知ろうとして、女の教えた「丁里」を尋ねてみたものの、女は影も形もなかったのだった(二八一頁)。女の正体を知ろうと努力する中納言の姿は、『源氏物語』夕顔巻で夕顔の正体を明らかにしようとする光源氏(および惟光)とも重なるであろう。三輪山型伝承の男女関係を逆転させた形態なのであり、女の正体を男が知った時、二人は永遠に別離することになる、というパターンなのである。中納言が、山陰の女と唐后が同一人物だと知りえたのは、帰国の直前のことであった。別離を前提として、正体判明がもたらされたのである。

なお、中納言が山陰の女を、「世に馴れぬ人にはあらざんめり」と思い、「丁里といふ所は、日の本の西の京なり」(二八一頁)という丁里を訪ねる件りは、『伊勢物語』二段の、

西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かた
ちよりは心なむまさりたりける。ひとりのみにもあらざりけらし。

という表現と似ている。この段は、二条の後章段に属するものである。唐后と二条の後とは、共通する話型があるのだろうか(即ち、帝の妻と臣下の密通、罪の子の出産)。

3・30 唐后、懐妊に気づく やがて、唐后に懐妊のきざしが現われた。

山陰より帰り給ひしままに、物などもつゆ見入れ給はぬに、過ぎ行く
月日かず経て、わが御心に「あやし」とおぼし知らるる事のみあるに、
「かかるべき契りにこそは」とおぼすには、うきもうからぬためし、
あはれにおぼして、…… (二八二頁)

このたびの懐妊がどんなにつらいものだったとしても、それを「契り」(宿世)として受け容れるしかない、と唐后は考える。そして、帝に対して秘密を守り通そうと決心するのである。このあたり藤壺と似ているが、

藤壺は光源氏の子供を桐壺帝の子供に仕立てあげようとした。唐后は、懐妊と出産の事実自体をなかつたことにしようとする。微妙に相異しているのである。

唐后が出産の事実を隠し通そうとするのは、帝には男の皇子は三人しか生まれぬという予言があつたからである(一八三頁)。人間には前もつて子供の数が決まっているのである(光源氏にも子供が三人だとする予言があつた)。(父と子)を重視する『浜松』の構成がほの見える。帝には三人の皇子が既に存在する。出産は、秘密のうちに行為ねばならないのだ。

3・31 唐后、蜀山に籠もる 唐后は河陽県に住み、帝都とは離れていた。そのため帝と接することが少なく、すぐには懐妊を帝に知られてしまう危険はなかつた。しかし帝がいつ河陽県を訪れるかもしれないので、后は父が隠通している蜀山に口実を作つて籠もることにした。その口実として、一の後の唐后に対する呪詛が用いられたのである(一八三頁)。

一の后(正妻)が唐后(後妻・妾)を嫉妬するわけで、へうはなりねたみのパターンである。弘徽殿太后による藤壺への嫉妬(更には、それ以前の桐壺更衣への嫉妬)が想起される。そして、はるかな地下水脈で、紫の上による明石の君への嫉妬とも通底しているのである。大姫が紫の上、唐后が明石の君と対応することは、以前に述べた(3・17)。大姫は、妬婦譚(うはなりねたみ)に属する『橋姫物語』のヒロイン(橋姫)とも重なるところがある。日本にいて中納言と唐后の関係を知らしめない大姫に代わつて、一の后が唐后を呪詛しているとも考えられるのである。

3・32 帝、三の皇子に讓位の意図あり 唐帝は唐后を寵愛し、二人の間の子である三の皇子を即位させる気持ちがあつた、とされている(一八四頁)。桐壺帝が、第二皇子である光源氏を東宮に立てたことと対応するであろう。光源氏は東宮に立坊すること能わず臣籍に降つたのだが、『浜松』の三の皇子は後に東宮に立つことができた。『浜松』が唐に対する日本の優位を基調として有しているからであるし、日本人の転生した人物を立て太子させ遂に即位させることがその基調にかなうものだからである。

3・33 中納言の嘆き 唐后が蜀山に籠もつたために、中納言は悲しんだ。

唐后自身を見ることができなくなったためだけではない。

中納言、人知れぬおもひたへがたくなりまざるにつけても、この後の、見し人にいとおほえしも見たてまつらまほしうて……

(一八四頁)

とあるように、山陰の女をしのぶよすがとしての唐后を喪失したからである。唐における中納言の愛の祖型として、大姫が存在した。その大姫の回復ともいうべき唐后の存在が、物語の流れの中で重要なのであった。中納言は、唐后を見て唐后の中の山陰の女的なるもの(祖型)を発見して心を慰めようとする。「①大姫↓②山陰の女↓③唐后」という中納言の順位づけ(山陰の女は大姫と似ている、唐后は山陰の女と似ている)が、「①大姫↓②唐后↓③山陰の女」(唐后とよく似た女性と山陰で契る、唐后を見て山陰の女をしのぼう)という中納言の意識と微妙に錯綜する。そして、真実は、山陰の女と唐后は同一人物なのである。定かではない真実、イメージの無間地獄の中で、中納言は苦しんでいる。なお、山陰の女と唐后は、完全に一致するものではないとも言える。唐后から「后」という地位を剝ぎ取って生身の女性にしたのが、山陰の女であるのだが、一人の女性の中に、二つの顔(表層と深層)を見ることが決して不可能ではない。そうなる、いよいよ何が実像で何が虚像であるか、わからなくなってしまう。それが、『浜松』の作者の意図したことではあるまいか。

3・34 六月祓 六月つごもりに、唐でも祓が行われた。唐の長河が、日本の大井川や宇治川に喩えられている(一八六頁)。この世とかの世、日本と唐とが重ね合わされているのである。日本と唐の関係は、言ってみれば、唐后と山陰の女との関係のようなものだ。同じと言えば同じ(重層する)、違うと言えば違う(日本の優位)。なお、この祓に際して中納言が詠んだ、

恋しさをみそげど神のうけねばや心のうちの涼しげもなき

(一八七頁)

という歌は、『伊勢物語』六五段の、

恋せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

を引歌(本歌取り)しているのである。唐后の中に山陰の女がいるように、そして唐の自然の中に日本の面影があるように、『浜松』の中にも『伊勢』が内在しているのである。その『伊勢』六五段は、業平と、清和天皇の後である二条の后との道ならぬ苦しい恋を描くものであった。唐后に、二条の後のイメージがある、ということだ。

ちなみに、三の皇子と中納言の関係は、『伊勢』の惟喬親王と業平との関係と似ていないこともない。三の皇子も一の大い家から迫害されているのであって、政治的劣勢に陥っている惟喬親王と通ずるところがあるのだ。

3・35 唐帝の人柄 唐后が一の後の呪詛を理由に奥山に籠もっても、帝は何ら対策を講じなかった。

このみかど、御かたち心なまめきて、あそびの道に心を入れ、強くさかしき方はおくれてや物し給ひけん、一の大い、后たちに、よろづおとりくびたれて、さばかり御心に入れておはせる河陽景の后を、跡絶えてものし給ふは強き所ぞおはせざるべきと、中納言はおしはかり給ふ。

(一八七頁)

唐帝は、決して賢帝・聖帝ではないのだ。一の后や一の大いを押しさえきせず、唐后(河陽景の后)への愛を貫くこともできない。そのあげくは、愛する唐后を中納言(臣下ではあるが帝をしのぐ美質の所有者)との密通に走らせてしまう。

これは、右大臣一派(弘徽殿太后一派)を押し替えることができず、愛する臘月夜を光源氏と通じさせてしまった朱雀帝の造型と重なるものである。と同時に、愛する藤壺を光源氏と密通させてしまった桐壺帝のイメージとも通ずるところがあるのではないか。桐壺帝の治政がどんなに延喜の聖代を模したものであろうとも、妻や子供を密事に走らせてしまうような帝王が聖帝であるはずがなからう。『浜松』の唐帝は、朱雀帝を通り越して桐壺帝と似ているのである。

3・36 中納言の思い 中納言は、山陰の女を忘れることができない。

(女が)「雲井のほかの人の契りは」とうち泣きて答へしけはひありさまは、すべて世々を經とも忘るべうもあらず。いみじう恋しうわりな

うなりたる古郷も、この人にあひ見で帰らん事は、えあるまじう思ひ渡る程に、秋も深くなり行く。(一八八頁)

愛する女性への恋情が執着して残る限り、安心して日本へ帰国することができない、と中納言は悩む。これをもう少し拡大すれば、愛する女性に執着が残る間は、安心して極楽往生できない、という発想になるであろう。ちように、式部卿宮が子(中納言)ゆえの執心のために転生したのと同じように。中納言は、わずかな人生の間にいくつもの絆を作ってしまった。この絆が、中納言を永遠に転生させつづけることであろう。「世々を経」という表現は決して誇張ではないのだ。

3・37 唐后、前世の契りを思う 蜀山の唐后は、後の地位にあり帝の第三皇子を産んだ身でありながら、日本の中納言と関係し懐妊してしまった自分の宿世を噛みしめていた。

(后は) 昔今のかねをかね、かなしうながめ出でつづおこなひ：

(后) 「人を疎く思ふべきにあらず。前の契りこそ、心憂くうらめしきわざなれ」 (一八九頁)

一体自分と中納言の間に前世にどのようなことがあったのかを、唐后は知りたく思う。仏教では、前世の因が現世で果を結ぶと教えている。前世(祖型)が原因で、現世での密通(反復)が生じたのである。しかし、神通力を持たぬ人間の身を受けた唐后には、前世の姿が思い浮かばない。現世(反復)を唯一の判断材料として前世(祖型)を推測し頭の中で捏造しようとしているのである。唐后は、秘かに前世における自分と中納言との(物語)を創作している。(物語)は、現在を説明するための祖型を創出しようという行為なのであった。祖型と反復(前世と現世)を重層化する試みなのである。そういう人々を登場人物として擁する『浜松』は、すぐれて物語的であると言えるのではなからうか。

しかし、(祖型)は容易には知りえない。唐后も、前世を知りえない。理由もなく存在しつづける現世での苦悩が、いよいよ前世における(祖型)探究の試みを増幅させてゆくのである。後期物語における仏教的雰囲気は、このような物語文学の本質から説明しうるのではあるまいか。

3・38 中納言、蜀山に赴く 中納言は唐后に合つて心の渴きを癒すべく、三の皇子が母后に当たった手紙を持って蜀山へ向かった(一八八頁)。中納言は、山へ昇つて下りてこない浮舟に薫が書いた(手紙)を伝えた小君のような役割を果たしている。(文使い)なのである。これを少し転換すれば、『長恨歌』の方士になる。中納言は、日本と唐、河陽県と蜀山を自由に越えられる境界線上の人物なのである。

中納言は、しかしながら、単なる文使い(媒介者)ではなかった。

山陰にて見るはめづらしく、目も輝く心地するに…… (一八九頁)

とあるように、中納言は光り輝く如意宝(具体的には、真如の光を放つ山の端の満月)に喩えられているのである。中納言は、救済者のように渴仰される。本人は、謎の女性や唐后(更には、故国の大姫)への執着心から苦悩している、というのに。たぶん、ここには、(苦しむ神)へ救済されるべき救済者」という思想が込められているのだろう。

3・39 唐后、男児を出産 蜀山で、唐后は秘かに中納言の子供を出産した。

いささか例にかはり、なやみわづらひ給ふけしきもなく、ただ袖のうちより生れたまへるやうにて、中納言の顔を、うつし取りたるをここにぞおはする。「すべて変化のことなり。いたくなやみ給はましかば、いかにせまし」と、うれしきに、ものおぼえず、心しりの人、二人あつかひたてまつる。(一九二頁)

袖の中から生まれるような安産だったとあるが、これは(袖の中の玉)如意宝珠の如き貴種を神仏から授かったことの比喩表現なのである。(袖の中の玉)が如意宝珠を意味することについては、拙稿「源氏物語第一部の構造」(『国語と国文学』昭59・8)を参照されたい。神仏の授けた子供ゆえに、予想外の平産だったのだ。「すべて変化のことなり」とされたゆえである。

説話ならば(申し子譚)のパターンになったはずで、夫婦が契つた日の夢で神仏から何らかの如意宝を貰い受けたことであろう。『浜松』は可能な限り物質としての如意宝を用いない方針があるので、この霊夢の部分は省

略されたのであろう。

男児は、すくすくと成長した。

隠しやしなふに、日々に物を引き延ぶるやうにて、ゆゆしきまでうつくしげに大きになり給ふを…… (一九二頁)

玉を延べたような美しい赤子が、目に見えて急速な成長を示す。これは常套表現のようではあるが、生まれた子供が如意宝であることを示すものだ。この男児は、不義の子でありながら、同時に如意宝でもある。冷泉帝と似ている。罪の子が如意宝でもありうるのは、父と母が本来は夫婦となるべき最高の美男美女だからである。以前述べた「二つの玉」の話型である(3・2参照)。制度上は罪、話型的には必然の「密通」によつて生まれた子供であるがゆえに、二重性(プラスとマイナス)を帯びることになるのだ。

3・40 中納言の帰国近づく 中納言が朝廷から賜わった三年の暇が、一日ずつ減つてゆき、帰国すべき日が近づいてきた。異郷(竜宮城など)で楽しい日々を送っている人物が、三年後に故郷を思い出す、というパターンである(山幸彦や浦島太郎など)。中納言の旅が終了しようとしている。終了とは、旅の出発点(日本)への帰還にはかならない。

その年も返りぬれば、みかどにも母上にも、「三年がうちに行きかへるべし」と、暇申してし程にもなりぬ。

母上をはじめ、大将殿の姫君など、恋しくおぼつかなき人多く…… (一九三頁)

などと、故郷に残してきた人々が列挙されるのである。浦島が故郷の老父母と対面するために亀姫と別れを告げたように、中納言も日本の人々と再会すべく唐后(山陰の女)と別離することであろう。

3・41 唐后、蜀山から河陽県に戻る 唐后は男児を出産後、蜀山から河陽県に戻ってきた(二九四頁)。ここには、女性の生き方の一つのパターンが表現されているように私には思われる。女性が「密通」の罪を犯したあと山へ登つてしまう。しかし再び男女関係を復活すべく下山するのである。宇治十帖の浮舟の未来も、下山(還俗)して薫とやり直すようにという横

川の僧都のアドバイスが正しいと考えられるのであった。蜀山を訪れた中納言に浮舟の弟である小君のイメージがあることは前述したが(3・38)、唐后も浮舟と重なるところがあるのである。

「密通」による山ごもりを、夫不信や愛人不信による山ごもりにまで拡大すると、直ちに『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』の世界が出現することは言うまでもあるまい。なお、浮舟は出家したあとで還俗して薫とやり直すことになるかと推測されるのであったが、『浜松』の大姫は尼のままで中納言に庇護されることになる。大姫も、ある意味で浮舟と類似しているのである。

3・42 唐帝の計画 唐帝は、帰国の迫つた中納言に大皇帝国の偉大さを見せつけようとする。最高の美人である唐后をこっそり中納言に見せて、唐の女性の美しさを記憶に焼きつけさせようというのだ。浅知恵としか言いようがないが、唐帝は中納言の脳裡に永遠の女性像を「祖型」として刻印しようとしているのだ。日本に帰つた中納言は、唐后と比較して「祖型」より劣るものとして「すべての女性を見ることになるう」と考えたのだ。しかし、読者は知っている。中納言が身近に唐后を見ることは、中納言と山陰の女との契り(祖型)の再現・反復である、ということ。唐帝の思わくを越えて事態は進行してゆく。そして、中納言は真実(山陰の女と唐后が同一人物であること)を知りうるであろう。

唐帝は、唐后に中納言に対する計画を打ち明けるが、あまりにもはしたない思いつきに困惑してしまう。しかし、

今日わが国のおもておこし給ふらんよるこびには、世の乱れ出で来ん事も知らず、三の皇子に位をゆづりて見せたてまつらん(一九八頁)

という帝の申し出もあり、計画を了承したのだった。結果として、三の皇子の立太子は紆余曲折を経て実現する。この時の唐后のイメージは、我が子・三の皇子の行末(将来の繁栄)を祈つて困難な事業に向かつていった女性であり、謡曲『海人』の海女と重なるであろう。唐后も、夫(唐帝)・子(三の皇子)・愛人(中納言)の三人の男性の間で苦しんでいるのである。妻(后)であり、母であり、恋する女性でもあるのだ。

3・43 中納言、唐後の琴を聞く 唐帝は、中納言にその人と知らせずして、唐後に琴を演奏させた。

うつたへに后をかくてすゑたてまつりて、弾かせ給はんものとおもひよらねば、さりげなき後目にとどめて見れば、春の夜の月かげに見し人と見るに、目もくるる心地す。(一九九頁)

中納言は、遂に山陰の女と再会することができた。女の琴の音色は、中納言がかつて聞いた唐後の音色とあやしいまでに似ていたのだった(一九九頁)。ここまでくると、真相まではもう一步である。中納言は、まもなく二人の女性が同一人物であることを知らされるであろう。

3・44 中納言と唐后(二つの玉)を形成す 演奏する女性の美しさは、限りもなかった。

(唐后の)にほひをちらしめでたきさま、むら雲の中より、望月のさし出でたる光を見つけたらんやうなるほど……(一九九頁)

というふうな、(唐后)という位置づけがなされていることがわかる。そして、中納言も並びなき美男子である。

中納言日本の第一のならばなき人なんめり、后わが世のたぐひなきかたち、御覧じくらぶるに、月日の光をならべて見ん心地して、わが世にかくめづらしき事を見聞くよと、世の例にも書きとどめ、語りつたへつべくおぼし召さる。(二〇〇頁)

唐帝の計画は、実現した。「世の例」にもなるべき伝説的な出来事(祖型)が出現したのである。日月の光が並ぶ光景が、唐帝の目の前で展開したのである。先程は(唐后)とあったので、必然的に(中納言)と太陽」ということになる。日(太陽)は昼間輝き、月は夜にあたりを照らす存在である。もともと、一つの場所に並んで存在することはありえないのである。それが、一つの空間の中に収納されたことの不思議さを唐帝を思う。昼と夜の比喩は、日本の美男と唐の美女が並び立つことの不可思議さをきわだたせるための趣向なのだろう。本来、唐にいるはずのない日本の中納言が、この場所にいる。中納言は、夜に出現した太陽なのである。

この場面を演出したのは、唐帝である。唐帝が、並び立つ日月(二つの

玉)の所有者なのだ。最高の男性を客人(臣下)として、最高の女性を后として所有する唐帝の偉大さが、とりあえず(表面上は)指摘できるであろう。しかし、この(二つの玉)は当然の如く互いに寄りあい、関係を結ぶ。臣下の男性と后が不義密通し、唐帝の権威・秩序を蹂躪し内部から崩壊させていくのである。そのあげく中納言は帰国する。(二つの玉)の話題も消え失せ、唐帝の理想性も形骸化してしまう。唐帝は、凡人でしかなかったのである。

3・45 女王の君、中納言に真相を語る 遂に、すべてを中納言が知る時がきた。唐后付きの女房である女王の君が、さかしき心からすべてを中納言に打ち明けたのだった(二〇三頁)。「源氏物語」で夜居の僧都が冷泉帝に出生の秘密を知らせる場面や、弁の君が薫に柏木と女三の宮の秘事を教える場面と似ている。しかし、「源氏物語」では密通によって生まれた子供の方に真相が告げられるのに対して、「浜松」では密通の当事者(父親)の方に打ち明けられるという大きな違いがある。「源氏」は父子の断ち切られた絆を子供の側が回復し、「浜松」は父親が真相を知ることによって子供といつまでも一緒に暮らそうとする。(父子関係)が「浜松」では重視されているのだが、三の皇子(式部卿宮の転生)が子供に執着し、中納言を唐まで呼び寄せる趣向に反映しているように、父親の側の愛執が問題にされることが多いのである。(母娘関係)の場合も、子供をあとに残して死なねばならない母親の苦しみ語られることが多いのである(吉野尼君など)。

中納言は、自分がかかる海を越えて唐に來た真の理由をやつと知りえたのである。父の転生した三の皇子と再会して父の執心を晴らすためであると同時に、唐において子供を作り自らが父となるためであったのである。子が父へと昇格するわけであって、反復から祖型へと中納言も上昇してゆくのだ。けれども、一つの愛執を晴らすことが、新しい愛執を産み出すことではなかった、ということには悲しい。ここに、「浜松」の主題を見いだすこともできるような気がするが、まだ深入りは避けておこう。

いつも、真実はあとから判明する。現在によって、過去が逆照射されるのだ。現在が過去を照らしたすのは、模倣され反復された行為を基点とし

て祖型を探究しようとする物語的営為とも合致するものである。

さて、中納言の渡唐を要請してまでこの世に生を享けた男児には、どのような運命があつたのだろうか。

これはこの世(唐)の人にてあるべからず。日本のかためなり。ただ疾くわたり給へ。(二〇八頁)

と夢告にあるように、日本において人臣として位を極めるべき人物なのである。天皇を輔佐し、娘を入内させて皇子を立太子させてゆく、という未来を実現するであろう。面白いのは、この男児が唐后の裏返しだという点である。日本人の母と中国人の父を持つ唐后は、后となるべく竜王の告げで海を渡った。やはり、混血児(日本人の父と中国人の母)である男児は、日本のかためとなるべく夢告によつて父と海を渡つてゆく。過去の出来事(祖型)が、変容を伴つて反復されたのである。

なお、不義密通の子供が(国のかため)でありうるのは、密通なるもの正体が(二つの玉)同士の聖婚だったからである。これは、光源氏の造型とも基本的に重なると思われる。拙稿「光源氏の玉の瑕をめぐって」(源氏物語の探究・第一三輯)所収「風間書房・昭63」を参照されたい。

3・46 子と別れる唐后の嘆き 唐后は、かつて自分が母と別れ別れになつた時のことを回想する。

「我もかのくに生まれて、母君の御身を離れてわたり来しほど、かくこそありけめ。今はとて別れしかあ月、いだき給ひて、いみじう泣き給ひし面影は、今に身をはなれぬ心地す。そのかはりに、又これを渡してんずるかなしき。母君のおはしけんも、かばかりにこそありけめ。事のむくい、げにあるわざにこそ」とおぼしつづく。

(二〇八頁)

娘の自分が母を捨てて国を隔てた過去(祖型)が、母となつた自分が息子と国を隔てざるをえない現在(反復)をもたらしたので。それを、唐后は(事の報い)と認識する。この因果応報の考えは、別に母子関係にのみとどまるのではあるまい。唐后と中納言の契りまで含めてよいのではあるまいか。母子の離別は現世の中に因果が双方存在したが、男女の契りの方

は、前世に因があり現世に果があるというようにやや複雑化している。しかし、発想そのものは同じなのだ。

3・47 唐后、中納言に箱を託す 唐后は、母吉野尼君に当てた手紙を(沈の文箱)に入れて中納言に託した。そして、吉野尼君の返信をこの箱に入れて送り返してほしい、というのである(二一〇頁)。この(箱)は、娘と母との間をコミュニケーションする素材である。『長恨歌』における(釵)と対応するものでもある。中納言は、二つの世界(日本と唐)を往還する幻士の役割(文使い、勅使)を果たしているのだ。

かつ、この(箱)は、唐后と中納言(男と女)、唐后と男子(母と子)をつなぐ素材でもあるだろう。浦島が亀姫から貰った玉手箱を開けたように、そして、中世神道集の竹取伝説で国司がかぐや姫の残した箱を開けたように、中納言もこの箱を開けることになる。(沈の文箱)は、何通りものコミュニケーションを象徴しているのだ。

3・48 中納言と唐后、別れの言葉を交す 二人の愛は「夢のような逢瀬と出産」とでも要約可能なものであった。二人の最後の贈答歌は、

(中納言) 二たびと思ひあはするかたもなしいかに見し夜の夢にかあ
るらん
(唐后) 夢とだに何か思ひも出でつらんだまぼろしに見るは見るか

は (二一一頁)

というものであった。(夢幻)ということであろうか。(夢)という言葉は、『伊勢物語』六九段(狩の使)のキーワードでもあった。ここでは、夢のような逢瀬と懐妊が語られていた。『浜松』のこの場面では、遣唐使(狩の使)と唐后(神に奉仕すべき伊勢斎宮)とのあるまじき夢のような契りを、『伊勢』とのオーバーラップによって表現しているのだった。

后は、更に、中納言に(琴)を授けた(二一一頁)。こちらは、男と女を結ぶ話型に位置づけられる素材である。(琴)は、大國主神話の中でも用いられていた。大國主は、正妻と琴などの如意宝を異郷から地上へと持ち帰ったのだ。『浜松』では、琴と子供である。妻を連れ帰らなかったところに、作者の深い企みがあることに気づかねばなるまい。中納言は日本で(如

意宝の力により）栄華をある程度実現してゆくことになるが、唐后と世を隔てられているために、その栄華の実質は不毛（空虚）なのである。実質のない繁栄、というものがあるのだ（『源氏物語』第二部も然り）。意味のない人生、と言つてもよい。

3・49 中納言の思い 中納言はもう一度唐后に合いたいと思つたが、かなわなかつた。

つひに逢ひたてまつる事なくて別れ去りなんうれへ、世々を経ともやすむべきにもあらず。 (二一三頁)

この思い（愛）ゆえに、中納言は転生することになる。「世々」とは、幾年たつたとしても、の意味の他に、何回生まれ変わったとしても、の意も含まれているだろう。「世」の意味が、深化・重層化・拡大化されるのである。

なお、『浜松』ではあらゆるものが重層化されていた。唐の中にも日本的なものもあるし、現世の中に前世も透視できるし、唐后の中に山陰の女が存在するのだつた。これをもう少し発展させると、男の中に女性的なものを見、女の中に男性的なものを見る『とりかへばや』の世界が出現して行くことになる。「重層化」が、後期物語のキーワードなのだ。

3・50 中納言、五の君と別れを惜しむ 中納言に純愛を抱いていた五の君も、中納言と別れる時がきた。一の大臣は邸に中納言を招待して、娘達の合奏を聞かせた。三の君が琴、四の君が箏、五の君が琵琶であった。その中で、中納言は「琵琶はいみじうすぐれて」（二一四頁）感じたのだつた。

五の君も、唐后とは並ぶべくはないが、かなりの美質を有していたのである。合奏において精神の卓越性を証明するのは、「嫁くらべ」や「女楽」のパターンでもあつた。

(五の君) かたみぞと暮るる夜ごとながめてもなぐさまめやはなかなばなる月 (二一五頁)

空にかかる月は、五の君が中納言に与えた「形見」なのであつた。

4 巻二を読む

4・1 中納言、男児を連れて帰国 中納言は渡唐する時には父式部卿官の転生した三の皇子と対面する気持ち強く希望に満ちた船旅ではあつたが、帰国の際は唐后との惜別の情でいっぱいであつた。否、そうではなかつた。渡唐の際にも、懐妊した大姫を残してゆくことを大変気にしていたのであつた。愛する女性と別れて船旅に出る、という点では、二つの旅は同一である。唐后との別離は、散逸首巻における大姫との離別の反復であるのだ。

さて、中納言は唐后との間に出来たいとけない男児を連れて帰国したのだが、この幼児は「いとけなきかたみ」（二一六頁）と書かれている。子供が遠くへ去つた母親をしのぶためのよすが（形見）である、というわけだ。実態は母が残り父と子が去るのだが、子を父の許へ残して母だけが昇天する白鳥処女型（天人女房）の話型とも重なるのである。

この男児は、男に恋する女性を想起させるかけがえない存在であり、成長して日本のかためとなると予言されている如意宝である。光り輝く、清らかな「変化の者」なのだ。だからこそ、船旅の間中、父の中納言は不安にかられていたのだ。

あさましく変化のものやうに清らかなるを、かつはゆゆしうおぼして、…… (二一七頁)

この子が如意宝であるがゆえに海竜王にめであられて、途中で竜宮城へでも連れさられるのではないか、という危惧を中納言は抱いたので。帰国後にも、天寿を全うせぬ不安が絶えずつきまとうことになるであろう。

まだ乳呑み子である子供を男ばかりしかいない船に載せるにあたつて、唐后は「薬」を授けた（二一六頁）。この「薬」は少し嘗めるだけで飢えや渴きが癒える如意宝であり、不死の薬の一変種である。母が子の幸せと繁栄を祈つて授けた如意宝であり、子を思う母の真心を結晶化させたものなのだ。この薬の由来は詳しく語られていないが、唐から門外不出とされていた秘薬なのであろう。

4・2 中納言、筑紫に到着 無事筑紫に到着した中納言は、気がかりであった母親と大姫に手紙を書いた。この二人は、中納言の日本における最大の絆である。大姫は（この女性は既に出家してしまっているので、以下「**尼姫**」と称することにする）、『源氏物語』で三年間都で光源氏を待つた紫の上、唐后は、明石で光源氏を見送った明石の君と構造上対応することになる。

4・3 尼姫の心境 尼姫は、中納言の帰国の話を聞いて、複雑な心境にかられてしまう。出家した姿を中納言に見られるのは恥ずかしい、何よりも出家していながら元の屋敷内へのうとうと居残っているのが恥ずかしい、というのだ。尼姫は、父が再婚する際の連れ子である。中納言の母（**尼姫**から見ると**継母**）にやさしくされながら、中納言（**義兄**）と関係し子供まで作った。尼となっても、継母から以前にもましてやさしく扱われている。善意の人々に取り巻かれていながら、あるいはそれゆえに尼姫はいたたまれない。尼姫には、人生の居場所がないのだ。

（どこに行こうにも）あらぬ所はなき物から、出で離れ逃げ隠れなんも、いとどけしからず。疎まれはてられたてまつらんも、限りあらん命のほどは、わりなうおぼさるれば、**山梨の花の心憂さ**をおぼし入るに、……
 (二二二頁)

「山梨の花の心憂さ」云々という箇所は、
 世の中を憂しと言ひてもいづこにか身をば隠さむ山梨の花

『古今六帖』

を引歌している。ところで、『源氏物語』宇治十帖で、この引歌によって「**山梨の花**」に喩えられていたのが大君であった。薫に求愛されている大君は、薫と結婚することに気が進まない。しかし、大君の女房達は**大君**のためによかれと思つて二人を結ばせようとする。

げに何の障りどころかはあらむ、ほどもなくて、かかる御住まひのかひなき、**山梨の花ぞ**のがれむ方なりける。
 (総角巻)

宇治の大君は、結婚を拒否する女性の典型である。『浜松』の**尼姫**は、尼となつて男女関係を持つことの許されぬ女性である。どちらも、男性と遂

に関係しない女性であり、それゆえに共通する苦惱（居場所のなさ）を抱えている。それが、「**山梨の花**」の共通の引歌によって示されているのだ。
尼姫は、宇治十帖の大君と類同性を有している。

しかし、大君は出家しなかった。出家したのは浮舟である。浮舟は、薫と匂宮の三角関係に巻き込まれ、失踪したあげくに出家したのだ。尼姫の出家も、一種の（**三角関係**）の結果だと言えないこともない。彼女は、式部卿宮（中納言の父の「**式部卿宮**」とは別人、**当帝の皇子**）と結婚する直前に中納言と関係したのだ。これを三角関係と呼べないこともないのである。**尼姫**は、浮舟とも似ている。

要するに、**尼姫**は、宇治十帖の大君と浮舟を足して二で割つたような女性として造型されているのだ。この二重性を、読者は絶えず念頭に置いておかななくてはなるまい。

4・4 中将の乳母、若君を見る 筑紫まで下向するように中納言に依頼された中将の乳母は、若君（中納言と唐后の子）を見て、その美しさに驚嘆した。

いだし出で給へるちごの御さま、大將殿のちご姫君（＝中納言と**尼姫**の子）を、世になき物に見たてまつり、人も思ひ聞えさせたるめでたさにもおとらず、さまことにほひいみじきものから、君の御顔もうつしたるやうなり。
 (二二三頁)

中納言の理想性が、ここで称賛されているのである。彼は、「ちご姫君」と「若君」の（二つの玉）の所有者である。女兒（陰）と男兒（陽）の最高のものを、一つずつ所有しているのだ。これは、中納言が、「**尼姫**」（日本の最高の美女）と「**唐后**」（唐の最高の美女）の（二つの玉）を所有することのヴァリアントである。「ちご姫君」は入内して皇位と関わりを持ち、「若君」は人臣として位を極めることであろう。ただし、異母姉弟ではあるが、二人の間に何かしらの男女関係（密通）が発生してしまう危険性もある。近しい関係の男女がゆかしげもなく結ばれるのは、中納言と**尼姫**（義兄妹）という立派な前例も存在する。

4・5 中納言、**尼姫**の出家を知る 中納言は、中将の乳母の口から**尼姫**

に関する一部始終を聞いた。「いといちじるき事」(懐妊と出産)があつて、彼女は「いみじき事」(出家)を思い立ったのであつた(二二四頁)。

興味深いことがある。唐における中納言と唐后との愛は、日本における中納言と大姫(尼姫)の愛を祖型とする反復だったと解されるのであつた。しかし、「懐妊と出産」に関する限り、中納言は祖型(日本での出来事)の方を實現していない。彼は唐で、唐后との間で、「懐妊と出産」(反復の方)をつぶさに経験したのであつた。そして、帰国後に尼姫の身に起こつた出来事(祖型)を知つた。反復を自撃したゆえに、祖型が切実に実感でき納得されるのである。近い過去を知ること、それを産み出した遠い過去が理解できるようになつたのである。この世(現世)を痛切に認識すること、前世が少しづつわかつてくるというと同じ思考パターンなのだ。

4・6 中納言の述懐 中納言は、宇治十帖の薫と同じような性格の人物だつたと考えられる。その中納言の心の中は、どのようなものであつたのか。

「むかしよりかかるかたさまにつけて、我が心をも乱らかし人にも心おかれなげかせじと、心強う思ひしたためしかひもなく、我が世も人の世も、よにしらぬ恋のみだれに身をば沈め、人にはいみじきものはせ、他人だにあらず、今は親たちに心おき、浅き恨みを負ひぬるは、すべてむかし思ひし事ども、皆違ひぬる我身なりかし」と、こし方行くさき、かきくらし涙にくれて、…… (二二五頁)

「我が世」においては、大姫と契り一女を生ませ、「人の世」においては唐后と契り一男を儲けた。それらの女性のみならず、それとつながるすべての人々を苦しめた。最終的には自分自身を苦しませ、執着の絆を数限りもなく作ってしまった。すべては、自分の女性へのあやくな愛ゆえなのである。

中納言は、自らの人生をふり返つてみた時、「こし方」と「ゆくさき」への大きな疑問が湧いてくるのをどうすることもできなかった。「こし方行くさき」は、単なる過去と未来ではなからう。自分の「前世」と「来世」まで含めているのはあるまいか。自分の宿命は、前世から来たものである

し来世までつづくものでもある、という認識である。

愛執の絆に搦め捕られてしまった中納言の姿は、〈孤〉〈個〉でありえぬ人間の真実の姿を象つたものであろう。どんなに一人で生きてゆき、絆を作らずに往生しようとしても、人間は〈共同性〉の呪縛の中で暮らさざるをえないのだ。中納言の人生は、読者である私達の姿とも重なるに違いない。

4・7 大貳の娘の登場 そのような中納言に、またまた新しい絆が一つ加わることになつた。太宰大貳の娘が、それである。この時は中納言は娘と契りを交さなかつたのだが、後に中納言は夫ある大貳の娘と密通し、子供まで生まれることになる。尼姫(大姫)や唐后とほぼ同機能であり、身分的には彼女らよりも劣る存在である。『源氏物語』の中の品の女性と考えたら、理解は容易であらう。高貴な藤壺への思いを代償する女性として、空蟬や夕顔の中の品の女達がいたのである。大貳の娘は、尼姫(出家したので契ることはできない)や唐后(海を隔ててしまつて会えない)の代償行為をすべく、中納言の前に姿を現わしたのである。

ところで、大貳の娘には、明石の君のイメージがある。これは、彼女の両親が明石入道夫妻と重なることの結果である。大貳は、見るだけで「命延ぶる心地する」(二二六頁)中納言を見て、期するところがあつた。中納言に娘をめあわせることで、如意宝のような子供に恵まれようとするのである。

大方人に似ぬ御癖と聞けば、せめてとかく思ひなして、月さし入り、をかききほどなる真木の戸をおしあけて、御しとねまあり、いれたてまつりて、障子に几帳そへて女をいだしたり。(二三八頁)

大系頭注は、「大体系中納言は普通の人に似ない(謹直な)お癖と聞くので」と注するが、大貳は中納言の「色を好む癖」に期待しているのではないかと、私には思われるのである。実際、中納言はこの世でも人の世でも、尼姫(大姫)や唐后を雲の彼方の人と思つただけでは済ませない好色の癖を持つている。読者も、それを知っている。大貳の姿は、明石の君に光源氏の子供を産ませることで一族の上昇を願つた明石入道の姿と完全に重なる

のである。ちなみに、大貳の計画に妻は反対する。

めでたきにて、よしなし。思ふ事異におはしまさん人に、あやつけうひきいでて、すさまじうはしたなき物を思ふかな。(二三三頁)

というのが、母親の論理であった。これは、明石の君を光源氏にめあわせことに当初反対した明石尼君の発言と少し似ている。父が明石入道、母が明石尼君と類似するため、必然的に大貳の娘は明石の君のイメージを負うことになる。大貳の娘は楼台にいるのだが(二二七頁)、これは明石巻における「岡辺の家」と対応するのである。

所のさま、山と海と帯びたり。みぎは見えていとおもしろきも、蜀山の大臣の御すまひ、まづ思ひ出でらる。(二二八頁)

「山と海」の両方の要素があるのは、明石もそうであった。なお、「蜀山」云々と唐後の父大臣が言及されているのは、大貳の娘が、作品以外の明石の君のイメージの他に、作品内の唐後のイメージを有することを表現しているのである。大姫の物語が変容を伴って反復されて唐後の物語となった。そして、唐後の物語が変容を伴って反復されて大貳の娘の物語となったのである。中納言は今回は娘と契らなかつたのだが、それは大姫との契りが多くの人に苦しみをもたらしたことの反省の上に立っている(二三二頁)。むろん、唐后との契りの反省も含まれよう。大貳の娘との愛は、確かに大姫や唐后との愛の「反復」であり「変容」なのである。

4・8 中納言、大貳の娘と結婚の約束だけして別れる。中納言は大貳の計画には乗らず、娘と寝所を共にしながら実事を行わなかつた。彼は、大貳の娘に次のように語る。

外さまになゆめゆめ思ひ給ひそ。かかる事を聞く聞く、この程にさやはあるべきといふもどきをさへおはじと思ひしのび侍るなり。今少し日数過ぎ侍りなば、かならずあづかりきこえ侍りなん。(二三三頁)

光源氏が軒端萩を体よく言いまるめている件りを連想させるところもあるが、それよりも赤猪子説話や『大和物語』一六九段などと関連することが大切であろう。男の軽い気持ちの結婚約束を信じて老いてゆく純情な女性、という話型がここに内在しているのではあるまいか。中納言の、

心からしづくににぐる別れ哉すまばなげかであるべき物を

(二三九頁)

という歌や、「親たち外さまにもてなすとも、ゆめさやうに思ひなびき給ふなよ」(同頁)という言葉が、男の約束を強調する機能を果たしている。しかし、女は他の男性と結婚し、のみならず中納言は女と関係を持つというように、赤猪子や『大和』一六九段と共通する「空しく老いてゆく処女」の話型は次第に消滅してゆく。そして、中納言と大貳の娘の関係が、そもそもそのなれそめは「大貳の娘——衛門督」(正式の夫婦)よりも古かつたことを読者に記憶させるためだけのものになっていったのである。密通の正当性を主張するための伏線となつた、ということだ。

4・9 中納言、唐に手紙を書く。中納言は、無事帰国できた由を、唐の人々に伝えた。唐后への溢れる思いは、女房の女王の君あての手紙にそれとなく封じ込めた。

女王の君のもとには、道の程もおそろしうしろめたければ、若君の御事など、かけても書き給はず、いみじういぶせうわびし。(二三六頁)

かくぞ世のつねなりける。(二三七頁)

唐后との密通、子供の出生などの秘事は絶対に暴かれてはならないのであつて、手紙に対する中納言の用心深い性格がうかがえるのである。『源氏物語』では手紙に関して注意深かつた光源氏と、軽率だつた柏木とが対比されていたが、中納言は柏木よりも光源氏と似ているのである。

中納言は、唐后だけでなく、一の大臣の五の君にも手紙を書いた。この手紙の内容が、意味深長である。

哀れいかにいづれの世にか廻りあひてありし有明の月をながめん
とて、「身をかへてばかりや、琵琶の音を聞かん」などぞ、こともなく
おもふには、さしも心に入らずおぼえし事にも、なみだのみぞかごと
がましうなりにたるや。(二三七頁)

こは、巻五以降の構想と関わっているのではなからうか。即ち、巻五以降では次のようなことが起こると予想されるのである。唐后は日本に転

生して短期間中納言と再会するが、中納言は二十五歳前後で死去してしまうので、又もや二人はすれ違ってしまう。死去した中納言は唐に転生して、五の君の琴の音を聞く。五の君は転生した中納言と再会するものの二人の年齢差から関係を持つにはいたらず、更なる執着を残したまま死去して転生を繰り返すことになる。……

中納言と唐后、中納言と五の君の双方の男女関係とも、「転生によって生ずる男女の年齢差」の問題を克服しえない、と私は見るのである。そう考えた方が、人間の果てしない愛執を見つめる『浜松』作者の創作意欲に接近できるのではなからうか。転生してきた唐后と長生きした中納言が、年齢差を越えて日本でめでたく結ばれるなどと考えるのは、『浜松』の作者の人間観とは相容れない楽天的人間観だとしか私には思えないのである。どうしても、中納言は若くして死去しなければならぬ。五の君は、巻五以降で重要な役割を果たすべくあちこちで点在しているのである。

4・10 中納言、母と再会 中納言は上京して、三年間息子の帰りを待ちつづけていた母と対面した(二四二頁)。この母君は、息子の帰りを大陸に最も近い松浦で待ちつづけた『松浦宮物語』の母君ほどの努力はしなかったのだが、それでも一日千秋の思いでいたのだうた。中納言は母の「さばかり若うさかりなりし御かたちの、いみじう瘦せおとろへて、あらぬ物におもがはり」しているのを見て、自分の「罪」を噛みしめるのだった(二四一頁)。母を心労で衰えさせていた不孝の罪である。

中納言が唐に渡っていた間、唐土では唐后との密通という罪を作り、日本では母に対して罪を作っていたのである。中納言は、罪の網によつてがらに縛りあげられている。

中納言は、両親に致富や不老長寿をもたらす如意宝だったはずである。それが、なぜ母を衰えさせてしまったのだらうか。如意宝には、あるべき場所がないと所有者にすらたるといふ不思議な特性がある。中納言という如意宝も、あるべき場所(母と一緒に空間)に存在しなかつたために母親に不幸をもたらしてしまったのだ。親子は同一の場所(屋敷内)で暮らすのが正しい、という思想が反映しているのであろう。ということとは、中

納言が日本に帰国したために、父の転生である唐の三の皇子は苦しい思いをしているのである。日本にいる中納言は、唐の三の皇子に対して罪を作りつづけている。

唐后も、それと同じような状況にある。彼女は自分を生んでくれた母(吉野尼君)や自分の産んだ子供と海を隔てて暮らしている。唐にいるために、日本の肉親を悲しませ、彼らに対して罪を作っているのだ。その痛切な認識が、転生をもたらすことになる。生存(というか、あるべき場所に不在であること、自分を必要としている人物の前にはいられないこと)自体が悪なのであり、罪なのである。この罪から逃れられる人物は、誰もこの世には存在しないだろう。

4・11 中納言、唐后の子の存在をそれとなく母に語る 中納言は、唐からこつそり連れ帰つて中将の乳母に養育させている若君のことを、母にそれとなく知らせた(二四二頁)。母君の気持ちは、

(子供としては中納言は)ただ一人(「尼姫との子」)おはするが、ゆしう心細きものに思ひ聞えさせつつ、今にこの御方にあまた出で来給へらんを、いくらもいくらも見あつかはまほしうおほし願ふ御心なれば、…… (二四二頁)

と表現されている。中納言が如意宝(子宝)であることは当然だが、その中納言が多くくの如意宝(子宝)に恵まれることを母として希望しているのである。中納言の子沢山を期待しているのだ。もし中納言が真の如意宝であれば、それは可能なはずである。宝は、自分の回りに別の宝をたくさん呼び集める性格を有するものだからだ。

しかし、子沢山を可能にするためには、中納言自身が如意宝であるだけでは不十分で、如意宝たる配偶者(妻)を有することが必要である。ところが、尼姫は出家してしまっているし、唐后は異郷にある。子沢山は、ありえないのである。ここに、中納言の限界が感じられる。中納言は新しい女性との正式の結婚を勧められても尼姫に対する遠慮から拒否するだろうし、せいぜい大武の娘(今は人妻)と密通するぐらいのことしかできない。正式な子供を量産することは不可能なのである。

4・12 中納言、尼姫と対面 中納言は、尼姫と対面し、涙にむせんだ。尼姫のようすは、

姫君は、ひたすら見じ聞かじとのみ思ひすて給ひにし(中納言の)人の御ありさまなれば、…(中略)…かやうにけぢかう、見え聞かれたてまつり給ひぬる事のあさましきにも、…(二四五頁)

と記されている。「見じ聞かじ」というかたくなな姿勢は、浮舟が薫の申し出を拒絶するところと似ている。ところが、尼姫は中納言と実際に見えて

いるのであり、一つ屋根の下で暮らしているのである。尼姫は、かくしても(ニ姫姿でも)さま異に、うつくしげなる事まさりけるにこそ。(二四七頁)

とあるように、なお美貌の所有者である。中納言は、

まいて仏のおぼさん心をしらではあるべきならずかし。(二四五頁)

と、尼との情交をタブーと認識する一方で、

我ならざらん人は、のちの罪、仏のおぼしめさん所など、更にたどらざらまし。(二六二頁)

と、尼姫との情交の可能性を思わずにはいられなかった。尼姫と中納言とが一つの屋根の下で生活するのは、(その後の浮舟と薫の姿を彷彿とさせる。光源氏(六条院を生活の本拠地としている)が、尼となった空蟬を二条東院で養っている、というのとは少し違っている。私は、夢浮橋巻以後の浮舟と薫は、還俗した浮舟と俗人の薫の共同生活だろうと推測しているのだが、還俗の前段階として尼の浮舟を薫が庇護するというワン・クッションが存在した可能性はある。この時、中納言と尼姫の姿がオーバーラップされてくるのだ。

中納言は、尼姫を出家にまで追いつめてしまった自分の罪をかみしめる。世を經とも、罪さるべきかたなく、あたらしういみじうもあるべきかな。…仏おのづから見給はずらん。(二四八頁)

ここにも「世を經とも」と転生が暗示されている。中納言が二十五歳前後で死去して唐に転生したあと、尼姫もそれを追うようにして唐に転生するのだろうか。〈罪〉が消える時、彼らの転生は終了する。罪が残る限り、

転生は終了しない。考えてみれば、中納言と尼姫との間の罪が消えても、中納言と唐後の間の罪、中納言と五の君の間の執着、中納言と大貳の娘との間の罪などは永遠に消えない性格のものであろう。一つ消えれば、他のすべてが残る、というものだからだ。張りめぐらされた人間関係(罪の網の目)から人間は自由になりえない宿命なのである。登場人物達の転生はつづいてゆく。転生は貴種としての榮譽などではなく、救済されざる魂を所有していることの罰なのである。

4・13 中納言、参内す 中納言は三年ぶりに参内した。

(中納言の姿は)目かかやくばかりなり。世にしらぬ御にほひ、百歩のほかにかざるばかりにて、日ごろも降りつもる雪、今もうちこそきわたすに、いとど光を添へたる御有さまにて、ゆききの道の人々もめづらしう見たてまつる。(二四九頁)

「光を添へたる」は、以前にも増して光り輝いていたということだろう。中納言の美質は、出国以前よりも増していた。三年間の唐滞在は、それなりのイニシエートをもたらしたのである。何が増したのか。(へかをり)である。「百歩のほかにかざるばかりにて」は百歩香の故事を引用しているのだが、唐后との契りの後中納言の身を離れなかつた唐后の香りをも意味しているのかもしれない。中納言は唐において唐后と契り、無上の喜びと苦惱を味わった。その苦惱の高まりが、外見的には光と香りの高まりとなって現われたのである。

4・14 中納言、唐をしのぶ 宮中では管絃の遊びが催された。降りくる雪と差しこむ月によって、中納言は唐のことを思い出す。

中納言はこの世の事もめづらしうおぼされて、見し世の春に似たりし程など、事につけつみじうおぼさるれば、…(二五〇頁)

中納言は、かつて唐にあつては、日本をしのんでいたはずである。そして、唐の中に存在している日本的なものを発見したのだ。今は、日本にあつて、日本の中にある唐的なものを見いだしている。日本(祖型)の反復として唐があり、その唐の反復として日本がある。日本と唐とが互いに互いを包含しながら、なおかつ並立している。現実世界が、異郷を内部

に抱えこむことで立体化してゆくのである。

尼姫も唐后も、このような次元での「二つの玉」なのだ。尼姫の中に唐后は宿り、唐后を通して尼姫のイメージを追い求めることができる。しかも、二人は別の女性なのだ。

4・15 中納言、中宮の許を訪れる 夜が更けてから、中納言は中宮にも帰国の挨拶のために参上した。この「中宮」はここが初出なのだが、中納言とはどういう関係なのだろうか。たぶん散逸首巻の中に、出自や入内のいきさつが詳しく描かれてあつたのだろう。大系補注三八七は、

首巻(欠巻)に入内前の中宮と中納言との間のあわい交渉が書かれていたらしいことを感じさせる筆致である。(四六九頁)

と推測するが、基本的に首肯できる見解である。ここでは更に推測を逞しくして、散逸首巻の内容を考えてみることにしよう。

中納言は、入内前の中宮と互いに愛しあっていたが、彼女の入内によって愛を失ってしまう(『伊勢物語』二条の後章段のパターン)。そして、その反動から石山寺に籠もつた。その石山寺で、偶然なことから大姫(のちの尼姫)と契つた。大姫は、式部卿宮妃候補だったが、結果として中納言が式部卿宮から大姫を奪うことになってしまった。

この推論のポイントは、二つある。一つは、入内によって愛人を奪われてしまった中納言が、今度は式部卿から愛人を奪うという逆の行為をしよう点。因果応報原理の発現であり、中納言の庇護する吉野姫を今度式部卿宮が奪うという、新しい逆転の構図を物語に呼び込んでくることになる(巻四末尾)。因果応報の出発点に、中納言と中宮の関係が設定されるのである。もう一つのポイントは、中納言と中宮の関係が設定されるのである。もう一つのポイントは、中納言と大姫の愛の以前に、中納言と中宮の愛を設定することで、祖型としての大姫像がやや弱められる点である。最初に大姫ありき、ではなかったのだ。こう考えると、大姫と唐后にほぼ同一の比重がかかっていることが納得されるのではあるまいか。

さて、中宮のイメージを追究してみよう。

(中納言の参内が)いとめづらしきを、宮(中宮)もいと忍びて、立ち出でて御覧するにやと、(中納言は)心ときめきせらるるにも、河

陽県の御簾の前、ふと思ひ出でられて、…… (二五一頁)

傍線部 a は、「源氏物語」で柏木を御簾の前で立って見ていた女三の宮を想起させるものがある(女の垣間見のパターン)。むしろ、女三の宮は柏木と密通したのだった。傍線部 b では、中宮と唐后が重ね合わされている。

その唐后は、中納言と密通して不義の子を儲けた女性である。更には中宮の入内にまわりついている二条の後のイメージ。二条の后にも、業平との間に不義の子(陽成帝)を作つたという伝承が存在している。中宮には、入内後に中納言と密通し、罪の子を出産、帝の皇子と偽って立太子させ遂には即位させる、という大きな話型が可能性として存在しているのだ。

(中納言は)僻事せられぬべくぞおぼさる。(二五一頁)

と本文にはある。この話型が発展してゆく素地は、十分に存在するのだ。

これは、しかしながら、現存する巻五まででは実現していない。話型が発芽することなく、立ち枯れになってしまったのだ。

けれども、中納言と中宮との関係が、(恐らく賜姓源氏である)中納言に栄華をもたらす最もつとり早い方法であることは確かである。光源氏も、この方法で准太上天皇にまで達したのだった。后との密事、出産とくると、唐后と中宮のイメージの重層は隠しようがないであろう。もし巻六が存在したとしたら、そこで書かれてあつたかもしれない。中納言が、中宮との間に子供を作つたとする。すると、中納言は四人の子供の父親となる。尼姫との間に女兒、唐后との間に男児、大式の娘との間に一児(たぶん男児)、中宮との間に男児、以上「一女三男」となる。唐帝には、「おとこ皇子三人よりほかおはしますまじ」(二八三頁)という予言があつたのだが、中納言も男児に限っては三人を儲けることになるのだ。「男子三人」は、中納言にも当てはまるのではあるまいか。

4・16 中納言、尼姫と起居を共にする 中納言は尼姫と、「朝夕さしならびたるやうにて」生活している(二五三頁)。

夜もただ御座をならべて、昔今の事どもをかき尽し、泣きても笑ひてもきこえつくし給ひ、…… (二五四頁)

というありさまであつた。男女関係(実事)なき男女の語らいなのだ。宇

治十帖で薫が大君や浮舟に期待したのは、このような仲らいいだったのかも
 しない。

浮舟が尼姿のまま薫の庇護下におかれたのなら、やはりこのような暮
 らしをしたことであろう。けれども、私はやがて浮舟が還俗することにな
 ると思いたいのである。それは、へ実事なき男女の語らいが男と女の理想
 的形態だとは思えないからである。実際、中納言には正式の結婚話が持ち
 上がり、尼姫は存在基盤が危機に陥ってしまう。このあたりは、正妻格で
 はあるが真の正妻ではありえない紫の上と、一派通ずるところがある。尼
 姫は、社会的に公認された中納言の北の方ではない。なぜなら尼姫が出家
 した身であり、女ではないからである。

4・17 尼姫の充足感 しかし、三年ぶりに中納言と再会し、暖かく接さ
 れた尼姫は、満足感で一杯である。

(尼姫は) この世もかの世も、思ふさまなる心地し給ひて、人々の御
 うらみをもなげきをも、みなさまし、めやすくさる方にあらせつた
 てまつり給ふ。(二五六頁)

もし、このような心境が永続するのであれば、尼姫は来世では必ず極楽
 往生できることであろう。こういう意地悪な書き方をしたのは、永続しな
 いと思うからである。彼女には、皇女降嫁の問題、中納言と他の女性との
 密通の問題などが降りかかってくる。更に、尼姫の往生の最大の障害と考
 えられるのは、ちご姫君の存在である。中納言との男女の契りは否定しえ
 たとしても、我が子との母娘の絆は絶ち切れるものだろうか。彼女の悩み
 は、母娘の絆を抱えているために、『源氏物語』の紫の上よりも深刻である。
 そして、もちろん浮舟よりも、尼姫の精神の自給自足は、長続きしないの
 ではあるまいか。

4・18 中納言の二人の子供 中納言が唐から連れ帰った男児も、中将の
 乳母の養育よろしきを得て、順調に成長してゆく。

これ(「若君」)をわがもとにて、姫君と左右にあそばせて、見まほし
 う飽かず(中納言は)おほいたれど、なほ思ふやうありて籠めおきた
 てまつり給へり。(二五七頁)

中納言は、何を心配しているのだろうか。ちご姫君と若君の(二つの玉)
 を得ながら、なぜ一つの屋根の下で育てないのだろうか。唐后との密事を
 暴露させないように配慮しているのだろうか。おそらくそうなのだろうが、
 深読みすると(二つの玉)同士の接近(男女関係の発生)を心配してい
 るのかもしれない。世の中には、筒井筒の恋もある。ちご姫君と若君は異母
 姉弟だから愛情の芽生える危険性は少ないが、『源氏物語』の夕霧と雲居雁
 はイトコ同士だった。中納言と尼姫も義理の兄妹でありながら結ばれた。
 (二つの玉)を一つの容器に収納しないことで、二人を結ばせず、女は入
 内させ男は重臣になってゆく、という未来を中納言は夢想しているのかも
 しない。

4・19 中納言、唐后との関係を胸に秘める 中納言は尼姫とは何の心の
 隔てもなく暮らしているのだが、ただ一つ唐后のことだけは口にしないの
 であつた。

尼姫君には、この世の事もかの世の事も残りなく、長きねざめに聞え
 つくい給ふ中に、河陽界の後の事ばかりぞ、心のうちに深くのこし給
 ひて、菊見し夕の御かたち、琴の音ばかりなどは、いみじうきき所あ
 りて、かたり給ふべき物がたりなれど、まづ先に立つ涙につつまれて、
 え言ひだに出で給はざりけり。(二五七頁)

大姫(尼姫)の愛の反復として、中納言と唐后の愛はあつた。そして、
 今、反復は祖型へと昇格し、唐后への思いが帰国後の中納言を捉えている。
 二人の女性は、同じ位相にあり、並立している。そして、互いに互いの存
 在を知らない(尼姫は唐后を、唐后は尼姫を)。転生を繰り返してきた人々
 が『浜松』の登場人物だと規定できるならば、尼姫と唐后は、世々(代々)
 中納言の人生を彩ってきた(二人妻)なのだろうか。しかし、この二人妻
 は、同時に所有されることはない(大国神の地上妻ヤガミヒメと根の国か
 ら連れ帰ったスセリヒメとが、共存できなかった神話を連想させるものが
 ある)。それと対応するかのようには、ちご姫君と若君は住むべき場所を隔て
 られているのだった。

4・20 中納言、唐后から託された文箱を開ける 中納言は、唐后が母に

渡すように依頼した箱を開けてみた。

(唐后を)飽かず恋しう思ひわびて、(中納言は)后のことづけ給ひし
文箱を取り出でたれば、取る手もうつるばかりなる、沈の文箱の大き
やかなるを、やをらあけて見れば、…… (二五八頁)

この箱そのものは、唐后と母吉野尼君(母と娘)を結びつける素材なの
だが、中納言にとっては自分と唐后(男と女)を結びつける素材でもある。
亀姫が浦島太郎に与えた「玉手箱」と通ずる一面が、この文箱にも存在す
るのだ。浦島太郎が玉手箱を開いてみた根源的理由は、現世での幸福を保
証する如意宝(玉手箱)を能動的に放棄すること、来世における亀姫と
の再会を願ったことによると推定されるのである(前掲拙著『御伽草子の
精神史』第一章参照)。「浜松」の中納言も、文箱を開いて唐后の手紙を読
んだあとで、

ただいまも鳥になりて、かの世に飛び行きて、河陽県にまゐらまほし
き事かぎりなし。 (二六一頁)

と思ったのだ。唐后との再会を祈って文箱を開けたのである。しかし、
文箱が中納言に俗世間での幸福を保証する物質としての如意宝ではなかつ
たので、文箱の開封が「如意宝の能動的放棄」を意味せず、二人の再会も
不可能だったのである。二人が再会するためには、片一方が自分の永遠の
幸福(極楽往生)を犠牲にするような行為が必要なのだ。

4・21 唐后から母吉野尼君への手紙 唐后の母への手紙は大変な長文で
あり、娘の母を恋うる情を真率に吐露するものであった。

雲を隔て山を隔てても、おのづからあひ見たてまつらん事のたのみだ
に猶侍らば、ながらへ過す身のゆくすゑもうれしかるべきに、いつを
いかにと頼むともなきありさまにて、いままで過し侍りぬる命のみこ
そ、うらめしきわざに侍れや。 (二五八頁)

「いつをいかにと」の部分、引歌がありそうである。玉葉・巻九・恋
一・一三〇七、

平宗宣朝臣すすめ侍りける住吉社の卅六首歌の中に不逢恋

従三位為子

いつをいかに待ち見よとだにちぎらぬにたのむる心さもぞつれなき
などに用例があるが、時代的に『浜松』と合わない。といって、玉葉歌が
『浜松』取りを意識的に行なった、というわけでもあるまい。「いつをいか
に」といには、『浜松』よりも先行する和歌が存在するのではなからうか、
という気がする。

更に、唐后の転生への決意が語られる。

この世の後の位も、身にはすべて益なう覚え侍り、ただ身を代へても、
おはしますらん同じ世の木草ともならまほしうのみ侍れば、命もつゆ
をしょうも侍らず。 (二五九頁)

大唐帝国(日本のような粟散国ではない)の後の地位を放棄しても母と
再会したい、という切なる心情が語られるのである。この心情は、泰山府
君の祭りなどと共通するものだ。泰山府君の祭りは、自分の生命を犠牲に
することで母親や師匠の蘇生を願ったり、自分の有する財宝を煙にしてし
まうことでよりよい幸福を得ようとする祭儀である。これが肉親や師弟関
係を主軸としていることは注目してよいことであり、唐后は自分の最も大
切なもの(自分の生命、及び後の地位)を能動的に放棄することで母との
再会を祈念しているのだ。転生は、このように如意宝(かけがえのない生
命、現在の地位)の積極的放棄という話型に属するのである。

ここは母への伝言であるから、母への愛ゆえに日本に転生すると書かれ
ている。むろん、日本に転生するのは、中納言への愛ゆえでもある。二つ
の愛は、並行関係にある。

しかし、唐后が日本に転生してくる時には、母は既に往生済みである。
中納言も、遠からず死去して、唐へ転生すると考えられる。唐后の転生は、
意図したものが達せられないのである。彼女の切なる願いにほだされて、
一旦は往生した母が再度地上に転生してくるようにも思われたい。人生の
あやにくさ、遂げられない愛というものを、作者は造型しようとしている。
又ものたぐひのおはしまするやうに、聖のかたり侍りしも、いと
ゆかしう、あはれに心ほそくおはしますらん御身に添ひておはすらん
も、あはれにうらやましうもうれしうも侍るや。 (二五九頁)

「ものたぐひ」とは、姉妹のこと。ここでは姉から妹（異兄妹）への愛が語られている。自分と母を同じくするものへの愛と執着が、唐后にはあるのだ。これは、外部の男性から見ると、姉（唐后）の代わりに異兄妹（吉野姫）を愛するようになるという（ゆかり）の手法となる。しかし、『浜松』の姉妹関係の面白いところは、姉（唐后）が妹（吉野姫）の胎内に転生して宿ったために母娘関係へと転換した点にある。肉親への愛執が、いつまでも切れることがないのだ。「血は水よりも濃し」というところだろうか。

この中納言、宮（三の皇子）をよのつねならず、いみじうおもひきこえさせ給へるゆかりに、ゆめゆめおろかには侍らじ、よしなうなどおぼし疑はず、おのが身を代へて渡りたるとおぼしなして、万をたのみおぼしめせ。（二六〇頁）

唐后は、さすがに中納言との深い契り（密通と出産）には触れない。中納言は、父式部卿の転生した三の皇子の母である自分といささかの縁があるから、自分の母であるあなたにも縁があることになる。私が中納言になって日本へ渡ったと思つて親しく中納言と接して下さい、というわけだ。

中納言と唐后は、同じ血を受けた血族ではない。性別も違う。しかし、中納言は唐后の形見でもありうるのだ。中納言の父を唐后が子とし、唐において対面した（更には、契つた）ゆえに、二人は愛執の絆によつて結ばれている。

この世にもまたその世にもあらかしかかるとの親子の中の契りは
（二六〇頁）

という和歌は、類い稀な悲劇的〈母娘像〉を表現として定着させようとするものである。祖型的母娘像の造型、と言つてもよい。唐后が母から引き裂かれてある悲しみを強調するための趣向でもある。

母と娘は一つの場所で生活するのが正しいのに、海を隔てて暮らさなければならぬ。この嘆きは、男女関係についても当てはまるものだろう。理想的な男女（二つの玉）は一つの邸宅の中で夫婦として結ばれるべきなのに、あるいは海を隔ててあえなかつたり、あるいは女性が出家している

ため関係できなかつたりする。そのことが愛執をいよいよ増幅させてゆくことになる。

4・22 唐后から妹への手紙 沈の文箱の中には、妹（吉野姫）への手紙も入っていた。唐后は、日本から渡唐してきたある聖によつて母が再婚して異兄妹を儲けたことを仄聞したのだった。

身を代へざらん限りは、あひ見たてまつるべき思ひの絶えて侍ることこそ、心憂く世に知らずおぼえはんべれ。（二六一頁）

これは、妹への愛（愛は執着と同義語である）ゆえに日本へ転生してくることが、ほのめかしている箇所である。母への愛、中納言への愛、妹への愛、それらすべてが錯綜しているのだ。そのすべてを同時に満足させることはできない。更に、日本への転生は、唐后にとつて我が子（三の皇子）と海を隔ててしまうことを意味する。愛執を絶ち切るための転生が、新たな愛執の絆を生み出してしまうのだ。

かの中納言のみて渡るちごは、思ひすつまじきやう侍れば、あはれなるを、もし見渡り給はば、なつかしうおぼせ。（二六一頁）

この「ちご」は、もちろん唐后と中納言の間の子供のことである。唐后が日本へ転生したいと思うのは、海を隔てた子供と再会したい母親としての愛情からであった。唐后は吉野姫を母として転生することになるのだが、その時吉野姫の回りに若君がいれば母子の再会が容易になる。この世では薄かった母子の縁を、来世では親しく接したい、ということだろう。

実際に、巻四に吉野姫が唐后の子をかわいがつたという記述が存在している。何らかの構想が作者の脳裡には宿っていたのだろう。それは、あるいは、成長した若君（子）と転生してきた唐后（母）との愛（隠された母子相愛）かもしれないと思うのだが、今は深入りをさし控えておく。

4・23 中納言、吉野訪問を決意 中納言は、唐后の手紙を母や妹に伝達しようとする。そして、吉野へ赴くことを決めたのだった。中納言の気持ちは、複雑である。

君すまば我も吉野に跡絶えてかばかりも世にめぐらさまし

（二六三頁）

という歌は、転生の終了する時の出現を祈る気持ちである。二つの玉が同時に一つの容器の中に存在しうる至福の時の到来、と言つてもよい。

年ごろは上(中納言の母)一人をほだしに思ひ聞えつるを、今はそれよりも思ひ添はせ給ふこそ、この世をそむきやるまじき契りにやと心憂けれ。(二六三頁)

とあるのは、母や尼姪が中納言にとつて大きな絆だという気持ちである。

絆のある限り、それを振り切つて出家することはできず、出家しない限りは転生の輪を断ち切ることができない。中納言は、この世の絆と来世での往生の間で、引き裂かれている。海を隔てて日本と唐に男女が引き裂かれているのは、このことの象徴化と考えることもできるのである。

5 巻三を読む

5・1 中納言、吉野を訪ねる 吉野行きは、渡唐が「大きな旅」であり伴の人をたくさん連れていたのに対して、伴もわずかな「小さな旅」であった。しかし、小さいけれども一つの「旅」ではあったのであり、渡唐が唐后との出会いをもたらしたように、吉野行きは唐后のゆかりである吉野姪との出会いをもたらしたのである。

中納言が唐后と契つたのは「蜀山」においてであり、そこには山のイメージがあった。かつ蜀山には、世を通れた唐后の父大臣が住んでいたのだ。父大臣は、奥山に住む俗聖とでもいった役どころであろう。中納言の今回の吉野への旅も、山(吉野山)、聖、美少女(吉野姪)と三拍子そろっている。蜀山における唐后との出会いが、今反復されようとしているのである。

『浜松』の吉野をめぐる描写は、『源氏物語』の若紫巻(北山、僧都、紫の上)と宇治十帖冒頭(宇治の山里、俗聖の八の宮、大君姉妹)を足して二で割つたような感じなのである。人物造型(人間関係の設定)のみならず、風景描写・自然描写も重なるのである。

頃は三月の廿日のほどなれば、雪こそつもらね、谷の底などには、なほうち消えとまりつつ、みやこにはみな青葉になりにし花のこずゑ、

今盛りに開け、散り残れるも、風に知らせんをしげに見え渡さるるに、
…… (二六四頁)

という吉野描写は、若紫巻の、

三月のつごもりなれば、京の花、さかりはみな過ぎにけり、山の桜はまださかりにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、……

という箇所と似ている。吉野の自然は、三一八・三二三・三三九頁などで哀れ深く描写されているが、総じて薫の宇治訪問の際の自然描写と類似しているように感じられる。話型の一致が、『浜松』・若紫巻・宇治十帖の自然描写の近似をもたらしたのである。

5・2 聖の人物紹介 吉野尼君母娘を庇護している聖の人となり、読者に紹介される。

聖は年六十ばかりにて、もと人がらは、くちをしき際にはあらざりければにや、なげの老人とも見えず、物清げにさらほひて、賤しからず、すまひなどきたなげならずしなして、堂どもあらまほしげなり。(二六五頁)

聖は、かつて故上野宮(唐后の祖父、吉野尼君の父)と泥懇であったことも記されている(二六八頁)。しかし、上野宮や吉野尼君との血縁関係は想定しづらいのである。上野宮ゆかりの人物だと、漠然と言うことしかできない。若紫巻の北山僧都と紫の上は血がつながっていたし、橋姫巻の八の宮と大君姉妹も父娘関係であった。『浜松』は、それらと少し異なっている。浮舟を庇護する横川の僧都と似ていると、言えるかもしれない。あるいは、橋姫巻で八の宮と親交を結んでいた宇治の阿闍梨のような感じかもしれない。『浜松』の聖は、上野宮に仏法の道を教え知らせる善知識であり、上野宮の死後苦しんでいる吉野尼君を庇護することになったのであろう。

この聖は、かなりの理想性を帯びている。真実を見抜ける人物なのだ。

5・3 中納言のイメージ 聖は、突如として吉野の山里を訪れた中納言を見て、驚嘆する。

(聖は、中納言を)まづうちまもりたてまつりて、仏などの変じあら

はれ給へるにやと見おどろかれて、うち泣きつつ、年ごろの御物語申し、…… (二六五頁)

聖は、中納言をへ仏の变化」と見た。これは、〔救済さるべき救済者〕、ないし〔苦しむ神〕と近い概念であつて、仏の浄土に住むことの可能な貴種が、ある事情によつて仮に俗世に出現したもの、という認識である。中納言は、愛執に苦しむ身近な人々を苦しみから解放すべく、人間として立ち現われた。しかし、それは自らが執着の絆を断ち切れなかつた結果でもあつたのだ。中納言の存在は、両義性を帯びている。

5・4 吉野尼君の人生 聖は、中納言に吉野尼君の数奇な人生を語つて聞かせる。父の上野宮の失脚によつて筑紫へ下り、そこで父と死別する(母は早くに死去していた)。唐から来ていた「しんの親王」と結ばれ一女を儲けたが(唐后である)、親王と娘は唐へ渡つてしまふ。上京した後、帥の宮と結ばれたが考えるところがあつて出家した。自分のようなつらい運命を背負つた女性も、世間的な普通の夫婦関係には入れない、と思つたからである。少し見方を変えれば、前夫(しんの親王)と現夫(帥の宮)の目に見えない三角関係に苦しんだあげくの出家だと、言えないこともない。

しかし、帥の宮と別れて出家したあとで女兒を一人出産した。吉野姫である。そのあと、ひたぶるに仏道に励むべく、吉野に籠もつて聖に師事しているのだつた。吉野尼君は、日本と唐のそれぞれの皇族と契つて、一人ずつ女兒を産んだ。彼女は、〔二つの玉〕の生産者の榮譽を荷う人物である(唐后とはすぐ別れたので、二つの玉の所有者とは言えない)。一つの男女関係が終了したあとで、別の男女関係が発生したため、厳密な意味での密通ではない。しかし、尼君には二つの男女関係が錯綜して重複しているように感じられたのである。それだけに、女としての苦悩は大きかつたのであるまいか。

彼女は、尼となつたあとで吉野姫を産出した。出家とは、女が女でなくなることである。しかし、出家したあとで、彼女は出産行為に携わることでもありつづけた。女性が女性であることを超克すること、母子の絆や愛欲の絆を断ち切ることにむづかしさを、示してあまりあるものがある。

5・5 聖、吉野尼君を評す 聖は、尼君の人生を要約したあとで、次のように彼女の宿世を評している。

されば、后のかのくにに、かざりすゑられ給へる御おぼえありさまなとは、(中納言は) 御覽せられけん、いとみじうさふらひきな。(尼君は) さる御むすめのかげにもえ隠れ給はず、前の世のさるべきものむくいにこそはとぞ見えさせ給へる。 (二六八頁)

唐后という最高の女性を娘として持ちながら、その恩恵の光を尼君は浴びることができない。前世での何かの行いの報いによつて、今世では苦しみの限りを尽くしたのである。しかし、娘の救済の光を母が浴びられない、というのは一面的なものの見方である。母としての自己犠牲の決意(自分が苦しみを引き受ける覚悟をすること)によつて、娘が唐后という栄華を獲得することになつたのだつた(3・8参照)。娘の栄光を浴びられないのではなくて、浴びることを最初から断念しているのだ。さればこそ、尼君の来世には希望がほの見えてくる。

この世はくちをしようおはしける人の、のちの世はしも、かならずかなひ給ひなんとす。女の身にては、いとみじうかしうおこなひつとめて、ぎえなどもいと深うぞものし給ふべかんめる。 (二六八頁)

来世では、往生できるであろう。尼君は、既に男女の絆(愛欲の絆)は断ち切つている。もし、母娘の情を断ち切ることができるとすれば、確実に尼君は後世を頼むことができよう。そして、そのためにこそ中納言が吉野に出現したのだつた。尼君は娘を中納言に託して、安心して往生しようとする。薫の宇治出現を喜び、娘達を薫に託すことで往生しようとする八の宮の心中と、対応しているのである。

5・6 中納言、尼君に文箱を渡す 尼君は唐后を夢に見た気がかりが胸中を去らぬうちに、中納言から文を渡されたのだつた。尼君の見た夢によつて、中納言のもたらした手紙が本物だということが証明されるのである。

この手紙の入つた箱は、〔唐后と吉野尼君〕の母娘関係を象徴するものである。のみならず、吉野尼君にとつてのもう一つの母娘関係である〔吉野尼君と吉野姫〕の絆をも包含しているのではあるまいか。

かばかりおぼしめてはてにたる世の思ひ、この御消息見給ふに、なほ
 さめがたげにおぼされて、…… (二六九頁)

忘れていた、断ち切ったと自分では思っていた唐后との母娘の契りが、
 中納言のもたらした手紙によって顕在化してくる。その認識は、前世から
 つづく因縁の糸の強さを痛感させる一方で、この因縁に引かされて来世で
 往生できぬのではないかと不安を尼君の心に掻き立てたのである。特
 に、自分の死後一人残される吉野姫の存在が気がかりなのであった。

ここで、娘(吉野姫)に対する尼君の心情を、少し先走りして辿ってお
 くことにしたい。最初は、娘が自分の往生のための障害だという認識が語
 られる。「この世の闇(子のよの闇)」「(二七一頁)とか、子が自分の成仏を
 妨げる「魔縁」である(二八二頁)とか、記されているのだ。しかし、「仏
 の変じたまへる人」である中納言と出合うことで、尼君は「わがのちの世
 のうたがひなく、涼しくおぼしやられ給ひつつ」という安心を得ることが
 できた(二八四頁)。尼君は、中納言に吉野姫を託した(三二〇〜三二二頁)。
 尼君は、自分にとって「絆(よき人)」「(三三〇頁)である吉野姫を、中納言
 という仏のしるべにそっくりと譲り渡したのだ。尼君は、臨終に際し
 て、娘を遠避ける(三三二頁)。娘への執着を心の中から消してしまふため
 である。尼君は娘への執着を断ち切るために、誰か娘を託すに足る人物の
 出現を待望していた、と聖は回想する(四二二頁)。

尼君は、中納言にすぎること、吉野姫への人間的情愛を捨てることが
 できた。その中納言は、尼君のもう一人の娘である唐后のゆかりの人物と
 して登場してきたのだ。尼君は中納言から唐后の手紙を貰うことで、
 一旦は母としての妄執を呼び覚ましたものの、最終的にはそれから自由にな
 りえたのである。中納言は、尼君にとって救済者以外のなにもでもな
 かった。

5・7 中納言、尼君を見て唐后をしのぶ 話を戻す。中納言は、吉野尼
 君に唐后と通いあう点のあることを認めた。

おぼしやるかたなく、はるかなる(唐后の)御なごりのあたりとおも
 ふには、(尼君が)いみじうなつかしう、心もとなくおぼしつるに、(中

納言は)よろこびつつまうで給ふ。(二七〇頁)

(尼君が)「雲井の外の人の契りは」との給ひし(唐后の)人の御けは
 ひに通へる心地するに、(中納言は)いとど涙もとどまらず。(二七一頁)

日本と唐が複線化・立体化していたように、ここでは唐后(娘)と吉野
 尼君(母)とが複線化している。吉野尼君の中に存在している唐后的なも
 のに、中納言は敏感に反応しているのである。簡単に言えば、母(尼君)
 が娘(唐后)の形見として、中納言に意識されているのだ。普通は、子供
 が親の形見なのだが、桐壺巻でも母北の方が亡き桐壺更衣の形見として帝
 には意識されていた。

しかし、尼君にしてみると、中納言は娘の唐后をしのぶすが(形見)
 なのである。中納言と尼君は、互いが互いにとっての唐后の形見なのであ
 る。その場には非在の唐后によって、中納言と尼君は結ばれている。そし
 て、尼君は往生の障害を中納言によって除いてもらったのだ。なお、
 互いに互いが形見である点は、宇治十帖宿木巻で、薫が中の君の中に大君
 のイメージを求め、中の君が薫を大君の形見と思うという状況とやや似て
 いるようだ。中の君は、異父妹の浮舟を薫に押しつけることで、男女関係
 のいざござから身を引いたのだ。

5・8 吉野山の自然描写 吉野の自然は、

さすがいみじく心ほそくて、山よりたぎり落つる滝のおと、耳近きに、
 松風の吹きあせたる、心ほそさはいふかぎりなし。(二七三頁)

とある。こは、若紫巻の

君は心地もいとなやましきに、雨すこしうちそそき、山風ひややかに
 吹きたるに、滝のよどみもまさりて、音高う聞こゆ。

という箇所と似ている。光源氏は藤壺を思い、中納言は唐后を思う。二人
 の愛執の罪は深いものがある。中納言の唐后への思いは、

ただいまも金翅鳥といふなる鳥になりても(唐に)飛び行きて、かく
 なんおはしますとも、いみじう告げたてまつらまほしう、……

(二七三頁)

と書かれている。金翅鳥（こんしてう）は、一はばたきで巨大な距離を飛ぶとされる鳥である。中納言がかつて日本と唐の自由な往還者であったこと、今その能力が失われたこと、以上の二面性を示すものである。ちなみに、金翅鳥の心臓が抜け落ちると如意宝珠（如意宝の典型）になるといわれている。物語の深層に、中納言を如意宝とする作者の意識が眠っていることがわかる。

5・9 聖、中納言の宿命を見抜く 聖は、さすがに中納言の二面性を看破していた。

（中納言が）経いとたふとく、あはれに読みおこなひておはするを、聖は仏のあらはれ出で給へらんよりも、めでたく見たてまつりて、いかばかり前の世に、よろづをおこなひ給ひけん功徳のむくい、かく限りなき姿とも生まれながら、いかなりけん違ひ目にて、濁多かる世に生まれ給ひけん、日めもすに悲しく見たてまつる。（二七五頁）

中納言は前世での積善の余徳で、現世での光り輝く美貌を獲得することができた。その一方で、前世での「違ひ目」により往生する能わず再び人間世界に転生してくることになったのである。むろん、「違ひ目」とは、男女関係や親子関係による妄執を指している。宇治十帖で浮舟を救出した横川の僧都が、

功徳の報にこそかかる容貌かたちにも生ひ出でたまひけめ。いかなる違ひにてかくそこなはれたまひけん。（手習巻）

と思う箇所と同工異曲である。更には、光源氏やかぐや姫の造型とも関連するであろう。物語の主人公・女主人公は、救済さるべき救済者という二面性が必須条件なのであった。

5・10 尼君、吉野を離れることを拒否 中納言は吉野尼君を十分に庇護できるように、都近き山里に移り住ませようとするが、尼君はその申し出を拒否する。中納言の下山勧告をことわったわけだ。下山の拒否は、集団（共同体）の中で魂の救済を図ることの拒否を意味する。徹底して孤（個）の魂の救済が希求されるのである。尼君が口にした拒否の理由は、

かはらぬ身ながらも、世をへだてたる（唐后の）御ためこそ、心くる

しう侍れ。

（二七八頁）

というものであった。中納言と唐后が唐で関係し、その縁故で中納言が尼君を庇護しているのだという噂が立つたら、唐后のために気の毒である、というのだ。下山は、どうしても新たな人間関係を発生させ、その波及するところは甚大なのである。一つ肉親の絆があったら、俗世間（山の下）にいる限り次々と別の絆が生じてくる。これが、人生の姿である。尼君は、そのような人生を拒否した。たった一つだけ残った娘との絆すら断ち切るべく、山の上にとどまる人生を選んだのである。

ちなみに、このような尼君の姿は、王朝女流文学のパターンである（山から下りる）人生とは大きく異なっている（3・41参照）。共同性の中で魂の救済を図る文学と、孤（個）に徹することで魂の救済が意図される宗教とが角逐しているのであり、吉野尼君を通して作者は後者の道を追究しているのがある。もちろん、尼姫（大姫）は前者の方に属している。出家の身でありながら、中納言と起居を共にしているのだから。

5・11 尼君の父上野宮 上野宮については、

父宮とても世にあひ給ふやうにもなかりし古宮（二七九頁）

と記されている。宇治十帖における八の宮の、
そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。（橋姫巻）

というイメージと似ているのである。八の宮は皇位をうかがって光源氏の激怒を買ひ、不遇の後半生を余儀なくされたのだ。上野宮が筑紫に配流されたのも、八の宮のように誰かにそのかされて皇位を望んで失敗したからかもしれない。尼君は上野宮の娘であるから、王権から疎外された敗北者である。しかし、そのような尼君の屈辱の人生があったからこそ、尼君の娘の一人は大唐帝国の后に立つことが可能だったのである。尼君のもう一人の娘である吉野姫も、式部卿宮（次期東宮）との間に一女を儲けることになる。尼君の次の世代は、着々と王権に食い入っているのだ。

5・12 仏の変化としての中納言 中納言は聖に物質的な援助を惜しまなかったため、まるで仏が中納言に変わって現われ聖を助けているかのようであった（二七九頁）。二八四・三二二頁では、中納言が尼君にとつてもへ仏

の変化)であつたと記されている。

中納言には、絆を解き放つてくれる人、絆を解き放つための修行に必要な経済的基盤を支えてくれる人、などのイメージがあるのである。けれども、そのような人は、他者の絆を消してあげることで自らに絆を作つてしまふことになつて、苦しむ破目に陥るのである。5・9で述べた中納言の存在の両義性を、想起していただきたい。尼君は、中納言に吉野姫を託すことで安心して往生した。その吉野姫は、中納言の新しい絆となり、果てしない愛執の苦しみを産み出してゆくのだ。中納言は救済者であると同時に、救済を求める者でもある。この二面性は、決して矛盾することではない。

5・13 吉野姫、唐后と似る しばらく、尼君の人生回顧がつづくのだが、尼君が吉野姫を産んだあたりを引用してみる。

(吉野姫が)四五にて、いみじうをかしげにて遊びありき給ふありさまの、「今は」とてもろこしに放ち渡しし(唐后の)人の御さまに、たがふところなく似給へるを、…… (二八〇頁)

妹が姉に似ているわけで、これは『源氏物語』で用いられた(宇治のゆかり)の手法である。宇治のゆかりは、父の血筋が共通するため異母姉妹が類似するのであつたが、『浜松』のゆかりは、母の血筋が共通するため異父姉妹が類似するのだ。その点では、少し違つている。吉野姫の美しさは、去年に今年は勝り、昨日より今日は光をそふる御ありさまを、…… (二八一頁)

と描かれている。吉野姫は、美しく光り輝く如意宝珠(夜光の玉)でもあるのだ。母である尼君にとつて、唐后と吉野姫は(二つの玉)である。尼君は(二つの玉)の生産者ではあるが、唐后は手放し、吉野姫との絆を断ち切ろうとしている。つまり、(二つの玉)は(二つの絆)でもあると認識されているわけで、尼君はそれらを放棄して一人の女性として生きていくとするのだ。それに換わつて(二つの玉)の所有者となつたのが、中納言である。彼は唐において唐后と関係し、日本においては吉野姫を託される。しかしながら、唐后とは別離せざるをえなかつたし、吉野姫は式部卿

宮の子を生むことになつてしまふ。中納言は、(二つの玉)を尼君のように捨てたわけではないが、結果として一つも保つことができなかったのである。手許に置いておきたい如意宝に次々と去られるのは、所有者としての中納言の限界を示すものであろう。

5・14 尼君の見た夢 吉野尼君は、「いとたふとげなる僧」が夢の中でお告げをするのを見た。

(唐后が)異世界の人になりて、わかれてのち、この思ひ(母への思ひ)かなふべうもあらねば、この世の人(日本人)中納言に縁を結びて、深き心をしめさせて、物思ひの切なるゆゑに、あつかはせんとはうべんし給へるに、…… (二八三頁)

これも夢告だけであつて、物質としての如意宝が存在しない。夢だけで十分なのである。僧から何らかの如意宝(物質)を貰つて夢から覚めると、その物質を手にした中納言が出現したので、夢告が真実であると判明した、とでもありたいところである。

さて、この引用でも明らかのように、唐后の中納言への愛は、一つには隔てられた母親とコミュニケーションしたい気持ちに支えられていたのだ。肉親への愛が基底としてあつて、その上に異性への愛が存在する。母親の絆が、異性と絆を作つてゆく。中納言にとつても事情は同じで、三の皇子(父の転生した人物)への思いが、唐后への思いへと転化していったのである。光源氏の母(桐壺更衣)への思いが、母とよく似ていると言われる藤壺への愛を呼びこんできたことも、構造的には一致するだろう。更には、薫が出生の秘密を知りたく思つて(父である柏木とつながろうとして)宇治を往還するうちに大君を愛するようになったことも、対応するに違いない。薫が大君を所有したいと思う気持ちは、自分の出生の秘密を他人に知られたくない気持ちと不可分の関係にある。これは、肉親との絆と異性ととの絆との重層化と把握すべきであらう。血のつながらぬ人物を通して自分の血族のイメージを追い求めるものであり(赤の他人の中に存在する肉親的なものへ反応するのであり)、最も広義における(ゆかり)の手法なのであろう。

5・15 中納言、吉野姫をゆかしく思う 中納言は、愛する唐後の妹が吉野姫だと思い、落ち着かない。

「とてもかくても、言ふ方なく、思ふ方なく思ひへだて、はるかにすべなう悲しき人(唐后)の、御ゆかりのあつかひぐさ出で来ぬるぞかし」と、その御なごりある心地し給ひて、(吉野姫が)よるひる心にかりておぼつかなく、…… (二八七頁)

というありさまであった。吉野姫(反復)を通して唐后(祖型)に触れたい、と思うのだ。この時、中納言は皮肉なことに、唐后のイメージを基にしてまだ見ぬ吉野姫の美貌を創りあげている。唐后の中に吉野姫的なものの存在を仮定し、唐后を通して吉野姫を見ているのである。中納言の心の中は、錯綜している。しかし、中納言は、

うちつけにふと思ひより、むつびよらんの心もなし。(二八七頁)

という心境でもあった。この中納言の心長さは、宇治十帖の薫のそれとよく似ている。このような悠長さが、姫君を失うことにつながってゆくのだ。

5・16 大貳の娘、衛門督の後妻となる これから暫く、大貳の娘と中納言の交渉が語られることになる。大貳の娘は中納言に好意を抱いてはいたものの、衛門督の後妻になることになった(二八八頁)。すべては、母親の指図であり、娘を中納言に結びつけようとする父の大貳は、この結婚に關与してはいなかった。娘の世俗的幸福のみを願い、結局は娘の心を無視する母親像が、ここには造型されている。

この衛門督は、中納言の叔父に当たる人であった。帥宮の娘を正妻としているのだが、彼女が年上で「こよなく年まさりければ、もとより心ざしもいとふかからざりければ」(二八八頁)というありさまで、それに代わる女性を求めていたのだ。そして、大貳の娘を見つけたのだ。やがて、衛門督と結婚した大貳の娘を、中納言がひそかに愛するようになってゆく。

この『浜松』の人間関係は、『源氏物語』の玉鬘物語と類似している。中納言が光源氏、中納言の正妻格である尼姫が紫の上、筑紫から上京した大貳の娘が玉鬘、大貳の娘を後妻にした衛門督が鬘黒、衛門督の北の方(帥宮の娘)が鬘黒の北の方(式部卿宮の娘)、というように見事に対応して

いるのである。中納言はこれまで大貳の娘と関係は結ばなかったものの、婚姻後の彼女とは契りを結ぶことになる。これは、翻って、鬘黒と結婚したあとの玉鬘と光源氏の関係を照射するものであろう。私は、『源氏』のゆかりとして『浜松』を認識しているのであって、『浜松』の中に沈潜している『源氏』的なものに感応しているのである。玉鬘の子が光源氏の子であったとしても、話型的には別に不自然ではないのだ。

5・17 中納言、大貳の娘の結婚を知る 中納言は、それまでは大貳の娘をこっそり山里に隠し据えて通い所にしようと考えていたのだが、彼女の結婚によってその計画はもろくも崩壊する。

忍びやかならん山里に、隠しすゑたらん。(二九〇頁)

かすかなる山里にかくしおきて、たまさかに忍びつつぞかよはまし。(三〇一頁)

山里に口惜しからぬ女を据えて折々通おうというのは、宇治十帖の薫の願いであった。又、『浜松』作者に擬せられる菅原孝標の女の『更級日記』に、

いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花紅葉月雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ。

とある件りをも想起せしめる。『更級』は女の側から「山里の女」の実現失敗を描き、『浜松』は男の側から描写している。

あてがはずれた中納言は、「我が心のどけさも、あまりあやしきまでおぼし知られて」(二九〇頁)とあるように、自分の「心のどけさ」を後悔する。これも、薫の姿と重なるものである。

ところで、大貳の娘との交渉が、吉野姫の物語に接続しているのはなぜなのだろうか。実は、吉野姫と中納言の物語も、大貳の娘と同じような筋書を辿ってゆくのである。中納言は、「心のどけさ」から(そのためだけに)はないのだが)吉野姫と契るに到らない、そのうち式部卿宮に吉野姫を奪われてしまうのである。大貳の娘との物語は、吉野姫との物語の伏線であ

る(祖型を作りつつある)、ということだろうか。

5・18 中納言、大貳の娘と契る 中納言は衛門督が父親(中納言の母方の祖父である)の看病で留守になるのを見すまして、大貳の娘の許を訪れ、彼女と関係を持った。ここは、光源氏が紫の上を看病するため二条院に行っている間に、柏木が六条院に侵入して女三の宮と契ったことと似通っている。又、

(中納言が)かしこによりてうちたかせ給へば、あか月かけて出づる月のまだ出でぬほどなれば、何のあやめも見わかず、衛門督の立ちかへり給へると思ふなるべし、あけて入れつれば、……(二九一頁)

という箇所は、匂宮が薫になりすまして浮舟と契る場面を想起させる。中納言は、ある時は薫のイメージを帯び、ある時は匂宮のイメージを有する。この二重性が面白い。

なお、これまでは、中納言は一貫して密通者、女性を奪取する者であった。大姫(尼姫)は式部卿宮妃候補だったのを中納言が奪ってしまったのだし、唐后との契りは唐帝の信頼を裏切る形で行われた。今度の大貳の娘との関係も、叔父を裏切るものであった。そして、その三人の女性のすべてに一人ずつ子供を産ませたのである。しかし、因果は必ず巡ってくるものだ。中納言は吉野姫を式部卿宮に奪われ、子供まで作らせられる。若菜巻における光源氏の姿とも重なるであろう。光源氏は、柏木と女三の宮の密通に際して、自分と藤壺の密通の罰だと思おうのである。

しかし、中納言と光源氏が違う部分もある。中納言は、密通される者(愛する女性を奪われる人間)という自分に課された運命を、自らの責任において引き受け、納得したのである。吉野姫が式部卿宮と関係したのは、唐后の転生である女兒を産出するためだった。密通されるというマイナスの行為が、愛する女性との再会というプラスの価値を有する行為へと転換するのである。光源氏は、このような心境には達しえなかったと思われる。『浜松』は、確かに『源氏』を一步前進させ、深化させている。

5・19 中納言、大貳の娘との契りに唐后を思う 中納言は、自分以外の男と結婚してしまった大貳の娘を責める。

(娘が)我が一つ心にもてはなれ(衛門督に)靡きたるうらめしさを、(中納言は)唐国の一夜ばかりの契りの程は、心にも入らず、あまりのどけきは、我が心のおこたりをば、知らず顔にて、ひとへに人の浅きに取りなして、恨みつづけ給ふを、……(二九二頁)

大系頭注が指摘するように、このあたりかなりの脱文があるのだろう。

意味が取りにくい。しかし、『浜松』の全体像から類推することは可能である。ここは、唐后との一夜の契りを、眼前(現在)の大貳の娘との契りに重ねている表現だと解さねばなるまい。又しても、一夜の契りが反復されたのである。日本での大姫との契りが唐で唐后との間で反復され、唐での契りが日本で大貳の娘との間で反復される。反復の反復として、大貳の娘は存在する。とするならば、大貳の娘を愛する中納言自身も、本来の存在の反復(影のそのまた影)でしかないのだろうか。中納言を本来の自己に戻すような始原的な愛は、もはや不可能なのだろうか。

5・20 中納言の大貳の娘への評価 中納言は、大貳の娘を本当はどのよう

に思っていたのだろうか。
あやしう、心くるしうらうたき人のありさまかな。いとおよびなく、心つくさざらんかきませのほどは、かやうに心うつくしう、なよよかならんこそ、思ひとどめらるべきわざなりけれ。(二九四頁)

光源氏における中の品の女性達と、大貳の娘は対応しているであろう。藤壺への思いを肩代わりする女性が必要だったことにも似て、中納言は唐后のイメージを大貳の娘に重ねている。「かきませのほど」は、中の品くらの意味なのだろう。又、中の品の女性は、空蟬は伊予介の後妻であり、夕顔も頭中将の愛人であった。三角関係という要素でも、『源氏』中の品の女性と『浜松』とは共通するのである。「らうたし」「なよよか」という大貳の娘の性格は、夕顔とかなり似ているようでもある。

5・21 自然描写 次の箇所は、菅原孝標女の和歌と似ているように思う。
ほのぼのと明け行く空のけしき、春秋のかすみきりよりもおとらず、
あさみどりなるこずるの、何となくけぶり渡りたるほどをながめて、
端近う柱に寄り居ておこなひ給ふに、……(二九五頁)

尼姫と中納言が艶なる雰囲気の中で対座する場面なのだが、傍線部 a・b・c が、それぞれ、新古今集・巻一・春上・五六の、

あさみどり花もひとつにかすみつつおぼろにみゆる春の夜の月と対応するのである。『浜松』巻一の、

浅みどり霞にまがふ月見れば見しよの空ぞいと恋しき (一七六頁)

が、孝標女歌と類似していることは、新潮古典集成『更級日記』の注などで指摘されている。新古今歌はもと『更級日記』に収録されているのだが、その場面では源資通が重要な登場人物として点景されている。唐の中納言が日本を月を見ながらしのぶだけの巻一よりも、中納言や尼姫の美質を称賛する文脈である巻三の表現の方が、『更級』の世界と近いような気がする。二九五頁は物語内では夏なのだが、『更級』の孝標女歌と通じあうのではなからうか。

5・22 中納言、尼姫に同情 大貳の娘と別れて帰宅したばかりの中納言は、勤行に励む尼姫の姿を見て、心を動かされた。

(尼姫の)いとけだかう清げににほひおほかる御ありさま、めづらしうをかしと見給へる人(大貳の娘)の月かげよりも、なほものごとにありがたうめでたう見え給ふを、いみじう思ひとりすましたる心も、なほ胸つぶれて、(大貳の娘との)飽かざりつる別れば、かたはらにさしおかれて、涙ぞ落ちぬる。(二九五頁)

中納言の心は、同じところを行ったり来たりしている。同じところをぐるぐると回っている、と言ってもよい。大姫(尼姫)を日本に残して唐へ渡って唐后と契り、唐后と別れて帰国して大貳の娘と契った。そして、大貳の娘と別れて帰宅し、尼姫(大姫)を哀れと思つたのである。(大姫(尼姫) ↓ ②唐后 ↓ ③大貳の娘 ↓ ①尼姫……) というように、中納言の思いは永遠回帰(循環)を繰り返すのだ。何が祖型で何が反復か一切明らかでない状態の中に、中納言は置かれている。それが、愛執によって心の曇った状態なのである。

その愛執の罪を、中納言もある程度は自覚している。(尼姫が)心ふかげにうちながめたまへる御ありさまは、ただいま極

楽のむかへありて、雲の上に乗るとも、立ちかへり、みすぐしがたき御けしきなり。(二九六頁)

中納言は、臨終の際に尼姫への執着が残り、尼姫と再会するために極楽往生をすら諦めて人間世界に転生するかもしれない、というのだ。三〇八頁では、唐后への思いゆえに中納言が転生しかねない、とも書かれている。これは、往生の自発的放棄(幸福の放棄)による再会(真実の幸福の獲得)というパターンなのだが、仏教的真理からみるとへ煩惱の霧なのである。罪の深きにや侍らむ、常より物あはれに侍りや。(二九六頁)

とある箇所は、中納言が愛執の罪を自覚していることを示すものと考えておいてよからう。この場合の愛執の罪とは、尼姫・唐后・大貳の娘の間を循環しつつ消えることのない情念の炎なのである。「燃えわたる胸のほほ(三〇八頁)」という語句は恋ゆえに身を滅ぼした術婆伽の話を想起せしめるが、中納言は確かに執着心ゆえに我と我が身を苦しめているのである。わが心ひとつにすみて、よからぬ(衛門督の)心にはもどかしうおほされて、(三〇三頁)

とあるのは、真実ではないであろう。色に動かされず澄みきろうと志しながら、不断に色に迷う存在として、中納言はある。大君、中の君、浮舟と絶えず執着心の向かうべき対象を変えつづけて遂には本心を失うに到った宇治十帖の薫の姿と、一致するであろう。薫を救済すべく浮舟は還俗し、中納言を救済すべく唐后は転生してくる。しかし、本当に薫や中納言の愛執が晴れる時があるのだろうか。

5・23 中納言、大貳の娘の夢を見る 中納言は、夢で大貳の娘を見て気がかりになった。

「夢にさへ見え給へるに、おそはれつつ」(二九七頁)

これは密通のあとの夢であるだけに、本来ならば女に子供が生まれたことを告げる霊夢であつたはずだ。『浜松』は、しかしながら、物質としての如意宝を可能な限り使用しないという方針なので、申し子譚の話型を採用しなかつたのである。ただ「夢」だけが形骸的に残っているだけである。大貳の娘は、この時子種を宿したのであろう。

5・24 中納言、大貳の娘のことを尼姫に話す 中納言は、何一つ残すことなく尼姫に打ち明けた。「のこる事なくかたりきこえ給ひて」(二九六頁)とあるし、「(大貳の娘の歌を) 忍びて女君(ニ姫)に見せたてまつり給ひて」(二九九頁)とあるように手紙まで見せていたのである。

一体に、中納言は尼姫には女性関係をめぐるすべての真実を話しているとされている(ただし、唐后との契りだけは別だが)。この二人の関係は、ちょうど光源氏と紫の上の関係と対応するものである。中納言にとって、尼姫は生涯の伴侶なのである。中納言の最終的な依り所は、やはりこの尼姫なのだろうか。ちなみに、光源氏の理想的配偶者は藤壺以外には考えられない。その藤壺の反復(ゆかり、コピー)として紫の上は登場し、光源氏の終生の伴侶となった。中納言は大姫(尼姫)と契ったあとで、唐后とも関係を持った。しかしこの二人は、唐后が大姫の単なる反復だとは考えられないのだった。尼姫に唐后のことが秘密にされている以上、尼姫の領域と唐后の領域とが拮抗し、並行していると考えねばならない。中納言の心の最深奥に存在しているのは、尼姫と唐后の二人の女性である、と言うことしかできないのである。

尼姫は、大貳の娘に同情して、中納言に、
 かからざらんさき(大貳の娘が結婚する前)にこそは、いざなひ給ひ
 てましか。(二九九頁)

と語る。他の男性と結婚した女性(又は、結婚しそうな女性)とわりなく契りをこめるのは、中納言の習性である。このあたり、三人の女性(尼姫、唐后、大貳の娘)が入り乱れて、中納言の心を苦しませている。やがて吉野姫も加わって、四人の女性が中納言の人生を彩ることになる。

しかし、四人の女性が中納言の人生と関わったとは言っても、光源氏が四人の女性に四季を割り当て一つの場所に秩序だてて配置したのは全く違っているのだった。中納言は、四人の女性を決して支配していないし、誰一人正式の妻としてはいないのである。まして、一つの空間にまとめることなどできるわけがない。中納言の限界が感じられる。

これもたれゆゑぞ。うちうちにこそ(尼姫に)かう背きはてられたて

まつりたれ、人ぎきに、また人をならべたてまつらじと思ひ持りしぞ。(二九九頁)

という中納言の言葉は、一人すら正式の妻を持ちえない中納言の資質を示すものである。そして、それが彼の誠実さの本質なのである。唐后が日本に転生してくると、尼姫と唐后が相交わることになる。その時中納言はどちらを選ぶのだろうか。どちらか一人を選ぶのか、それとも二人を一つ屋根の下で両立させるのか。たぶん、中納言は苦しい選択をする前に、死去して日本からいなくなってしまうのである。中納言は、そういう人物ではない。

5・25 夢の浮橋 中納言と大貳の娘とのあやうい情事は、かろうじてつづいていた。

それより後ひまいとありがたくて、をとも女も、かたみに哀れと心をかはし聞え給ひながら、行きあふ事いとかたし。わづかに夕暮のまぎれ、よひのほどほどは、夢の浮橋の心地して、あはれにおぼし出でらる。(三〇〇頁)

中納言と大貳の娘との契りは、決して途絶えてはいない。(夢の浮橋)はあやういものではあるが、確実に男女関係を成立させるものなのである。

中納言は、娘が恋しい時には心を娘の許に送る(思いをはせる)。その心の軌跡が夢の浮橋なのである。やがて、この夢の浮橋を通って、中納言は実際に女と逢うためにやってくるのだ。宇治十帖末尾の〈夢の浮橋〉も、私見では一度天上(山上)に去った浮舟が下山する時に使用するであろうところの橋である。夢の浮橋は、男と女を結びつける手段なのだ。

5・26 後の位 尼姫は、中納言から手厚く保護されている。そのありさまは、

いみじからん後の位もなにかはせん。(三〇五頁)

と語られている。これが、『浜松』作者を『更級日記』作者と同一視する一つの根拠となっているのである。『更級』では、『源氏物語』を読むことの喜びを、

後の位も何にかはせむ。

と表現しているのだ。『更級』と『浜松』の用例が同じレベルのものかどうかを判断する前に、『浜松』の内部論理を確認しておくことにしたい。実は、この物語には他にも二箇所ほど類似する表現がある。まず、唐后が母(吉野尼君)と離れていることの苦しみの叙述として、

この世の後の位も、身にはすべて益なう覚え侍り。(二五九頁)

とある。これは、実際に後の位にある人物の発言である。そして、後の位という尊い身分(一種の如意宝)を放棄して日本に転生することで母と再会し孝養を尽くしたい、と言っているのだ。二番目は、式部卿宮の心情である。巻五で、

この人(吉野姫)いたづらになりなば、やがて我が身もあと絶えて野山にゆきまじるべきぞかし。国王の位もなにかはせむ。

(四〇八頁)

という表現があるのだ。式部卿宮は当帝の皇子であり、実際にも皇太子に立つ準備が着々と進行中である。彼は遠からずして即位することであろう。国王の位を手にする確率の高い男性が、一人の女性との愛を貫くためには国王の位を捨ててもよい、と言っているのだ。これも、如意宝の自発的放棄という話型に属するものである。

以上の二例を踏まえて、当該巻三の〈後の位〉を考察してみよう。尼姫は、現実的には後の位とは無縁だったように見える。しかし、そうではなかったのだ。彼女は、最初有力な東宮候補である式部卿宮の北の方におさまるはずだった。しかるに運命の力によって中納言と結ばれ、出家して尼となったのだ。可能性としては極めて高く〈後の位〉に即くべかりし尼姫が、その地位に昇ることなく尼姿で生きつづけたのである。ところが、尼姫は現状に満足して、「いみじからん後の位もなにかはせん」と思っているのだ。式部卿宮に嫁して後の位に昇るよりも、出家して中納言に庇護されながら仏道修行に励む方が人間として幸福だった、と言っているのだ。これも、如意宝の放棄による真の幸福の獲得という話型に属するものである。ということは、『浜松』の全用例が同一話型に支えられていることを示すものだ。

では、『更級』はどうか。孝標女は、『源氏物語』の後達に憧れてはいるものの、現実には〈後の位〉に昇ることは全く可能性として存在しない。後の位(かけがえのない宝物)を放棄しようにも、失うべき宝(后になる可能性)が何もないのだ。所有しない宝は、棄てることできない。これは、『浜松』の三例とは違っている。

結論を示しておく、〈後の位〉は一見『浜松』と『更級』に共通しているように見えるが、表現を支える話型が異なっている。〈後の位〉という表現の共通を以て、『浜松』と『更級』の作者が同一人物であることの証拠となしえないのである。むしろ、これは作者別人説の主張では毛頭ない。別の証拠(内部徴表)を捜して、作者同一人物説を検証すべきだと考える次第である。

5・27 左大将と母君の満足感 満ち足りた気持ちになっているのは、尼姫だけではなかった。中納言の母(実母)も父(義父)も、〈家〉の秩序の完成を喜ぶ気持ちで一杯である。このあたりで、『浜松』は作品としての一応の区切りを迎えているのかもしれない。『源氏物語』の藤裏葉巻のような感じなのである。藤裏葉巻で源氏と藤原氏が和解するように、『浜松』でも義父(左大将)と中納言が和解する。

母上も、大将の、「中納言が」我をうけ給はぬ」と、言ひうらみ給ひしも苦しく、又ふさはしからぬ事に思ひ澄み給へりしけしきも、はづかしうわびしかりしを、今は皆一つにおぼしとけにたるを、うれしう思ふ事なうおほいたる御けしきも、あはれにいみじく、御八講のほど、上達部殿上人など、日々におはします。(三〇六頁)

このような新しい秩序がもたらされるまでの、〈家〉の歴史を概観してみることにしよう。最初に幸福な家庭があった。故式部卿宮(父)、母君、中納言(子)の三人が一つの秩序を形成していたのである。二番目にくるのが、家庭崩壊である。父の死、母の再婚、子と義父の確執、義兄妹の密通、子(中納言)の渡唐、妹(尼姫)の出家、というふうには家は分裂と混乱を極めるのである。三番目に、家の再建が語られる。子の帰国、子と義父の関係修復、義兄妹が夫婦のように仲よく暮らす、孫の出現、というように

して、新しい秩序がもたらされたのである。継子譚(『鉢かづき』)とも共通するところがあるが、それよりも、一度失くした宝物や幸福を試練を乗り越えて取り戻す(玉取り)の話型であることが重要であろう。

中納言は、ここに到るまでの苦難を回想する。渡唐(継子譚で言えば、継子の家庭出奔に該当する)の際の心苦しさが、最たるものであった。

もろこしに渡りしほど、かの姫君(『尼姫』)を見なれて、程もなく立ち離れん、飽かずいみじかりしを、……いとほしう苦しう、人々の歎き乱れ給ひけんと思ふにいみじけれど、…… (三〇七頁)

この(別れの苦しさ)は、唐后と別離して中納言が帰国する時にも反復されていた(4・1参照)。このような苦しみの蓄積を糧とすることで、それなりの現状安定が可能となったのだ。苦悩を増幅させたのは、中納言ばかりではなかった。

この若君を、(唐后が)いとあはれに放ちがたげにおぼしたりとききに、又行きあひ見給ふべきやうもなくてうちおぼしおこすらん御心のほど、(中納言が)思ひやるかなしき、せんかたなし。 (三〇七頁)

唐后が子と別離するという、女性の犠牲(献身)の上に、中納言の生活の安定があるのだ。他者の苦悩と悲哀を糧として、中納言一家は新しい秩序を打ち建てたのである。この唐后の犠牲が、彼女自身の心を裏切る時がきつとくる。母として奔る彼女の情念は、子と再会すべく彼女を日本に転生させることになるであろう。唐后は、いくつもの自己犠牲を繰り返してきた。母(吉野尼君)に対して、中納言に対して、子(若君)に対して、申し訳ない、もう一度逢いたいという情念をその度に増幅させたことであろう。母や子への親子の情、中納言への男女の情、それらがなймаぜになつて、唐后の転生を呼び込んでくるのである。

5・28 中納言、式部卿宮と語る 中納言は、式部卿宮と宮中で出会い、よもやま話をした(三〇九頁)。式部卿宮を本格的に登場させる端緒であり、物語が新しい構想(三角関係)の開始を告げる場面である。一人の女性をめぐる中納言と式部卿宮の角逐というのは、実は散逸首巻で語られていた大姫(尼姫)をめぐる二人の争いの反復である。かつて設定されていた祖

型が、変容を伴って反復されることになるのだ。

さて、二人が直接語りあったのは、唐の出来事だった。

さては、河陽県といふところに住み給ひし後、第三の大臣のむすめ、かたち限りなき名とりて、楊貴妃などのやうに、時めきおぼされながら、一の後をはじめ、あまたの御方にそねみうれへられて、だいのうちにもさぶらひ給はで、河陽県におはせし、その宮のあたりの人などは、この世の人に、物いひありさまも違ふところなう侍りき。……(中略)……いみじき人をなん見給へりし。……(中略)……光りかがやくとは、これをいふべきなりけりとなんみえ給へりし。 (三一頁)

唐后を、楊貴妃と上陽人のイメージの合成として紹介し、その宮のあたりの人(侍女)のすばらしさを賛美する。このあたりの中納言の口調は、『竹取物語』のくらの皇子の架空の異郷訪問譚と似ているから不思議である。ただし中納言はすべてを語ったのではなく、唐后との関係を気取られないように、唐后とその侍女をうまく混同して話している。

中納言は、このように唐の回想を口にすることで、心の中で尼姫のことが少し忘れられて、唐后への思いがわかまってしまうのである。これが、中納言の吉野姫への思いを加速させてゆくことになる。

一方、式部卿宮の方はどうか。

式部卿宮は、「さる人を見おきて、我ならば帰らざらまし」との給はせて、「なほ捨てがたう思ひたる大将の姫君(『尼姫』)は、この世に又すぐれたる人にこそあらめ」とおぼすに、くちをしう胸痛き心地せさせ給へど、色にもいださせ給はず。 (三二頁)

式部卿宮は、中納言が唐で見てきた美人をゆかしく思うと同時に、中納言の庇護する尼姫への執着を高めてゆく。尼姫に代わる、現世(日本)で最高の美女獲得への欲求が高まってゆくのである。

「人の世」(『唐』)の唐后を思う中納言、「この世」(『日本』)の美女を欲する式部卿宮。この世と人の世の錯綜の中から、吉野姫の運命が徐々に姿を現わしてくることになる。

5・29 中納言に皇女降嫁の話あり 帝が、これほどすばらしい中納言を

ただの臣下として見るはずがない。皇女をめあわせようとしたのだ。

をとこ宮は、この式部卿の宮ひとところおはします。女宮は、あまたおはしましけり。承香殿の女御と申す御腹に、女宮おはしますを、心苦しきことに思ひ聞えさせ給ひて、女御の御方さまに、たのもしかるべき後見などなくて、心細き御ありさまなるを、「かくてあるほどに、中納言にゆるしてばや。大将のむすめ（＝尼姫）はさまことにて、うけばる事あらじ」とおぼしとりて、……（三一四頁）

帝は帝で、娘への執着に苦しみ、その後見を中納言に託すことで、自らの退位後の心配の種を一つでも減らそうとしているのである。帝も、父娘の絆ゆえに苦しんでいる。

皇女降嫁は、『源氏物語』でも何回か描かれていた。まず、光源氏に降嫁した女三の宮。女三の宮も、父朱雀院の（父娘の絆）を断ち切るために光源氏に託されたのだった。それは、これまで正妻格であった紫の上の苦惱を発生させる結果となった。尼姫の、

「もとより住み離れなましには、おとる事かな」とおぼせど、いかがの給はん。（三一七頁）

という気持ちには、紫の上の内面と類似しているのである。尼姫は、尼であるがゆえに中納言の正式の妻ではない。正妻でないことが皇女降嫁をもたらしそうになり、彼女の地位のみならず胸中を動揺させるのである。

又、宇治十帖でも、女二の宮の薫への降嫁が語られていた。『浜松』の中納言が皇女を無視したように、薫は女二の宮にさほど心が動かなかった。正統的な皇統を引く女一の宮の方に、薫の思いがあったからである。中納言は、尼姫や唐后など正式に結婚できない女性のみを愛している。中納言の人物造型は、案外単純なのである。薫はその点二階立ての精神構造をしているのであって、皇統への執着（表）と宇治の姫君への執着（裏）の二つの側面を有している。『浜松』の世界は、平板である。実際、皇女降嫁はあっさりとした沙汰止みとなってしまふ。その平板さの中で、過去・現在・未来・日本・唐の世界が複雑に入り乱れる。平面的な複雑さは、万華鏡の世界に喩えてもおかしくはあるまい。

5・30 中納言、吉野を訪れる 中納言は、八月の十余日、吉野を訪問した。

いと物悲しう分け入り給へば、風のけしきも秋になりけり。あはれはことに見ゆるに、千草の花々の色々も、都よりことにおもしろうて、あはれぞ深くしられける。（三一八頁）

このようなしみじみとした自然描写の中で、中納言を中心とする人々の（人間の絆）が改めて確認されるのである。

吉野尼君にとつて、中納言は娘（唐后）をしのぶための形見である（三一九頁）。同じく、尼君にとつて、吉野姫は強い絆である（三二〇頁）。中納言は、ふと自分と実父の強い絆を口にし（三二二頁）、吉野姫を唐后のゆかりだとも思う（三二四頁）。目に見えぬ強い糸で結びつけられている様な人間絵巻が、秋の月や松風などを背景として効果的に用いながらしっかりと語られている。自然描写は、断ちがたき人間的情愛を示すのに実にふさわしい舞台背景である。それが、（もの）あはれとでも言うべきものなのだろうか。しめじめとした雰囲気の中で巻三が終了する。

（この稿未完、以下次号。一九八八・七・一七）

昭和63年8月5日受理

人文社会科学系列 文学研究室

My Reading of “*Hamamatsu-Chūnagon-Monogatari*”
(Part I)

—— from Lost Vol. 1 to Vol. 3 ——

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

This paper only tries to read “*Hamamatsu-Chūnagon-Monogatari*”. Through intensive reading I try to find tale-types, structures, and motives. “Reading between (under) the lines” is my method of study.